
破面襲撃

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破面襲撃

【Nコード】

N1150H

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

死神VS破面の戦い。子供達が次々と危険な目にあう小説。オリキャラ翼登場第二弾！！

始まりの書

ピピッピピッピッ

伝令神機がなっている。

翼は胸元から伝令神機を取り出す。

「現世……空座第一高校

3..00 p. m

なんだ、一護のいる学校か……」

むくりと身体を起こし、軽く伸びをする。

タンツと軽快な足音と共に翼が飛び上がる。

「虚なんぞ俺の敵じゃねえ」

翼はつまんなそうに屋根から屋根へ飛び移る。

く空座第一高等学校く

「一護」

ルキアが一護にこっそり話しかける。

「なんだよ」

「虚だ。場所はどこだ」

一護は目を丸くする。

「いつごろだ？」

「3..00・・・あと5分後だ」

「じゃあ今から待っておくか」

一護は立ち上がりすぐに教室の外にいった。

「おーい！黒崎い！！どこ行ってんだ！！」

担任の越智先生が勝手に出て行った一護に向かって叫ぶ。

「腹痛ッス！」

そういつて一護は走っていった。

「先生、私、黒崎君を連れ戻してきます」

そういつてルキアも出て行った。

く翼く

「到着と・・・あと2分くらいか・・・」

翼が伝令神機をみる。

「んっ？あれは・・・一護？それとルキア」

二人が校庭に出る。

「おっあれは翼じゃねーか。おーい！翼あー！！」

一護が上空にいる翼に向かって叫ぶ。

気づいた翼が軽く手を振り、二人の下へ降りていった。

「虚はまだのようだな」

「ああ。翼、伝令神機には3..00となっているが・・・3..00になっても虚が出てこないではないか」

「俺に言われてもな・・・」

確かにそうだ。3..00になっても何もおきない。

「なあ翼、虚の気配を感じとれねえか？」

一護の提案に翼がうなづく。

翼は、霊圧探索の力にとっても優れており、霊圧を隠していても分かる位優れている。

キュウウン

翼の瞳が変わった。ジーと天を見る。

「・・・・北に強い霊圧を感じる・・・・。そうだなあの3階の教室あたり・・・・というか中かな」

翼の指差す方向は一護の教室だ。

「ウチの教室じゃねーか!!」

「急ぐか？」

「あつたりめーだ!! いくぜ! ルキア! 翼!」

『おう!!』

三人は教室に向かって走り始めた。

始まりの書（後書き）

またまた登場！これからよろしく！

壺の書

（教室）

（ねえ、たつきちゃん）

（なに？織姫？）

（さっきからなんだか変な感じがしない？）

（あんたも感じてんの？）

（うん）

織姫とたつきは声を潜めて話す。

二人の視線はふと前を向いた。すると、たつきの席の2つ前から、妙な感じがした。

（たつきちゃん・・・あのんだれだろ？）

（そーいや、知らない奴だな）

二つ前の席に座っている男は確かに見慣れない者だった。

二人がひそひそ話していると、窓から一護、ルキアが入ってきた。

（黒崎君、たつきちゃんの二つ前に座っている人。なんかヘン）

（はあ？あれは・・・えーと・・・誰だ？）

（一護のたわけ！あれは・・・見慣れないな）

（てめえもかよ！！）

一つ言っておこう。

ルキアはクラス全員の顔と名前を把握している。

「一護!! そいつをとっ捕まえろ!!」

翼が入ってきた。

「え・・・ええ!!」

「そいつのにおいと霊圧は・・・人間のもんじゃねえ!!」

ぱっと振り返ったルキアは霊力を集中させた。

（確かにそうだ・・・!! なぜ気づかなかったのだ!!）

ルキアは駆け出しそいつに向かって斬魄刀・袖白雪を振り下ろす。

ザン!!

（よし! 手ごたえアリ!!）

ルキアはそう思った。床に、鮮血が飛び散る。

「キャアアアアアアア!!」

クラスの女子が叫ぶ。

「何だよコレ・・・わけわかんねえ!!」

男子たちも驚きを隠せない。

ルキアが斬った男は床に倒れこむ。

「一護、確認だ」

「ああ・・・分かってる・・・」

一護と翼はその男に近寄る。

「ふん、雑魚だったか・・・」

翼がそいつを仰向けにする。

死んだのを確認した時だった。

「・・・死神もこんなもんかあ」

そうつぶやいて男がムクリと起き上がった。

「興ざめだ・・・死神」

そういつて男は姿を消した。

～浦原商店～

「・・・で、そいつは消えたと?」

浦原の言ったことに、三人はうなずいた。

「追うにしてもさうとう集中しねーとなんともならん」

翼が茶を飲む。

「しかし不思議じゃの。破面が人の皮をかぶるとはな」
アランカル

夜一は腕を組みながら考える。

「だが・・・確かにあの時斬ったはずなのだ・・・頭をな」

数秒の沈黙

「考えてばつかじゃ拉致があかねえ・・・」
俺は町に出て奴を・・・！！！！！！」

翼は、ぱっと外を見る。

「感じる・・・外で奴が何かしてんのが」

「確かにそうじゃの・・・」

「よし！なら外へ行って奴を倒してやるぜ！！」

「無防備に行くのはあまり承知したくはないのだが・・・」
しかたない、ゆくぞ！」

おう！と、一護、翼、夜一は答えてそれぞれ外に、瞬歩で散っていった。

「・・・頼みますよ、私はここで奴の居場所を特定致します」

浦原は店の奥へ姿を消した。

壱の書（後書き）

一護とルキアは、学校の皆に見つからないところに義骸（一護の場合は肉体）をおきました。

浦原商店でも、本編にはありませんが、ちゃんと脱いでます。

式の書

く一護く

「あんつの野郎！どこ行きやがったコンチクショー！！！」

街中を一護はただただ走っていた。

「やっぱりルキアや翼についていきやよかった・・・」

今更悔やんでも後の祭りである。

————一護がぼやいていた時だった。

「だ・・・誰か助けてー！！！」

か弱い・少女の声が聞こえてきた。

その少女は工事現場にいた。うえに鉄管がぶらさがったクレーンがある。

「あのままじゃあぶねえ！！！」

びゅうううううう

ひとときわ強い風が吹き、とうとう鉄管が落ちてきた。

ガキイイイイイイインン！

鉄と鉄がぶつかる音が響く。

鉄管は、一護（と少女）の左右に落ちる。

——一護が斬月で叩ききったのだ。

ガラガラガラ・・・

また鉄のすべる音。

上からどんどん鉄管が落ちてくる。一護は少女を抱え、走って工事現場を後にした。

「美樹！！良かった・・・無事だったのね」

その少女の母親は涙目で、少女・美樹を見つめる。

「うん！もう大丈夫だよ！」

美樹は元気よく答える。

「怪我が無くてよかった・・・」

そうつぶやいて一護はまた町を走り出した。

く夜く

夜一もまた、一護と同じように街を走っていた。

「なんじゃ・・・この胸騒ぎは」

夜一は瞬歩を使い一気に駆け出す。

「うわああああああ！お・・・おちるゝ！！」

今にも橋から落ちそうな勢いである。

「健！健！しっかりなさい！すぐに警察がくるわ」

「ママ！痛いよー！腕が痛いよー！！」

「大丈夫！しっかり！健！がんばって！！」

健と呼ばれる男の子はもう我慢できないっ賭ிட்ட様子だった。

「なぜ自分の子を自分で助けようとはせぬのじゃ。最近はこれだから困るんじゃ」

夜一は眉間に軽くしわを寄せ、健のすぐそばまで歩いていった。

「すぐに助けてやる、じっとしておれ」

そういつて、健を橋の上へと引き上げた。

式の書（後書き）

更新遅くなってすみませー!! 今度からはまじめにやります。今度からこのコーナーは読者質問コーナーと致します。どしどしおくらね

参の書

（ルキア&翼）

二人は一度浦原商店に戻り、対策を練っていた。時々感じる霊圧を頼りに、

外に行くことにした。

二人は義骸を着ていた。見た目は、

ルキアは淡いブルーのワンピースに白い靴。

翼は、胸元に、文字の入った白いタンクトップにジーンズとスニーカー。

二人は道を走っていた。しかしなかなか奴は見当たらない。

町はもう黄昏たそがれに染まってきた。

「なかなか見当たらぬな」

「それに、特に変わったことはねえな」

二人はすぐ近くの、公園に入った。

子供がまだたくさんいたが、なんら変わった様子はない。

—————だがその近くのビルの下がなにやら騒がしかった。

「何の騒ぎだ？」

「とりあえず、私たちも行ってみよう」

翼はルキアに軽くうなずき走っていった。

「どうした？何があったのだ？」

ルキアがすぐ近くの男に聞く。

「それが・・・あのビルの上に子供がいてもうすぐに落ちそうなんだ」

ほら！そこつと男が指差す。

「・・・！！ルキア！行くぞ」

「うむ！」

だだだつと走り出す。ルキアは翼に掴まった。

そして翼はダンつと地を蹴り、群集を飛び越える。

タタンつと着地し、ルキアを降ろす。

「あそこまではジャンプしてもギリギリとどかねえ」

翼も少し考え込む。

それもそのはず、特殊義骸だとはいえ、義骸は義骸。

そして、ビルの高さが尋常じゃないため、流石の翼も届かない。

「なにか足場さえあれば・・・」

ルキアは考え込む翼を別に、何か足場になりそうなものを探す。そして、すぐ近くにある車を見つけた。

「翼、アレが使えるそうだ」

ルキアは車を指差す。

「それだ！」

そういつて翼は車を持ち上げる。翼は華奢きゃしゃな体つきとは別に、ものすごい力持ちだ。車くらいは楽に持ち上げる。

周りがどよよと騒がしくなる。子供はすぐにも落ちそうだった。

「もしもんときは頼むぜルキア！」

「うむ、分かっておる」

翼は車の屋根に飛び乗り、さらに上へと飛び上がる。ビルで仕事をする会社員たちは飛び上がる翼に驚く。

翼は子供を抱え上げ屋上まで行く。

「成功だ！！」

やじ馬の一人がシーンとなっていた場を、一気に歓声が広がる場にした。

ピッピッピッピッ

と伝令神機が鳴る。

翼が電話に出る。

「もしもし」

「翼！子供は無事か？」

「ああ、少し落ち着いたとこだ」

「よし・・・分かった。早く降りてきてくれ」

「ああ、分かって・・・!!」

翼の会話が途中で途切れる。

「翼!どうしたというのだ!翼!翼!」

ルキアが何度呼びかけても翼は電話に出なかった。

やじ馬たちがどうしたんだ?なにやってんだ?とざわつき始めた。

ルキアはスピーカーホンを押す。途切れ途切れ音が入ってきた。

周りのやじ馬たちもルキアの周りに集まる。

「・・・てめえ・・・ざけ・・・うあああああああ
あああああ!!」

大きな声で叫ぶ翼の声が聞こえてきた。そのとたん、屋上から人が落ちてきた。

「つ・・・翼あ!!」

ルキアは急いで手を翳す。^{かざ}

「縛道の三十七!吊星」

翼と子供はうまく受け止めた。地面ギリギリだったので、少しだけ地面にぶつかった。

「かはっ・・・ル・・・ルキア・・・」

「翼!しっかりしろ!どうしたというのだ!!」

「奴がいやがった・・・」

「なっ・・・」

翼の左足は、太もも半分より下側が黒く焼けている。

「・・・わりい・・・逃げられちゃった」

「気にするな・・・何があったのだ」

「それは・・・」

翼がゆっくり体を起こし話し始めた。

参の書（後書き）

呼んで頂きあざーい（軽！！）
これからも宜しく！！

四の書

「ああ、分かって・・・!!」

翼とルキアとの会話が切れてしまったときだった。
奴が現れた。

「ん？あのときの死神かあ・・・」

怪しい笑みを浮かべる。

「うるせえ！てめえ・・・また人皮かぶってんだろ？」

翼は左手を軽く振っている。左手の甲は赤くはれている。
左手に奴の攻撃を受け、そのため伝令神機を落としてしまったのだ。

「ああそうだ」

「デメエの目的はなんだ？」

翼は痛む左手で子供を抱きかかえる。

「大量虐殺が目的だ。貴様らの世界に魂魄を流し込むためだ」

「てめえ！！ざけんな！！」

奴がにやりと笑った。

「虚閃^{セロ}」

発射された虚閃^{セロ}をかわす。

完全にかわしたと思ったが、次の瞬間、奴は翼の目の前に現れた。

「虚閃^{セロ}」

次の攻撃は翼に向けてでなく子供に向けてだった。

（餓鬼^{がき}が危ない！！）

翼は子供をかばって背を向ける。

それでも何とかしようと思地面を強くけり、かわそうとしたが奴の攻撃を受けてしまった。

「うつ・・・うあああああああああああ！！！」

そして今に至る。

「そうか・・・そんなことがあったのか」

ルキアは翼の足の怪我を見て、どれほどひどかったのかを直ぐに理解した。

「・・・まあ、餓鬼^{ガキ}が無事だっただけでもいいほうだろ」

そう言った直後だった。

「夕祈^{ゆづき}！」

若い女性の声がした。

「ママァー！！」

夕祈も駆け寄る。

「よかった。無事でよかった」

夕祈の母は、翼を振り返る。

「本当にありがとうございました。おかげでウチの息子が助かりました」

「いや・・・礼を言われるようなことはしてねーし」

「いえ・・・。それよりお怪我は大丈夫ですか？」

「ああ、これくらいなんともねえ」

ピーポーピーポ

「・・・・・・・・・・」

翼が黙り込む。

「・・・ん？翼、あれは「きゅうきゅうしゃ」ではないか？」

「ルキア！面倒だから逃げっぞー！」

翼はルキアに掴まって身体を起こす・・・が

「だめだめ！怪我してんだから」

「そうだ！救急車に乗って早く病院へー！」

周りのやじ馬たちが二人の行く手を阻む。

「邪魔だぁー！！どけどけどけえー！！！」

翼が足で思いつき蹴り飛ばしていく。

そして、群集を乗り越え、いろんなところを遣って逃げていく。

「とりあえず・・・浦原商店に行くぞ！！ルキア」

二人は再度浦原商店に向かった。

四の書（後書き）

質問コーナーQ&A

Q 翼に、他の特殊能力はありませんか？

A はい、あります。幻術や催眠術は効かないという特殊能力があります。

伍の書

「わりいな、織姫」

翼は織姫に治療してもらっていた。

「それにしても・・・義骸とはいえ翼にこれだけの攻撃を加えた奴じゃ。」

油断はできぬぞ」

夜一の一言で、全員の顔が凜とする。

「にしても・・・奴の目的が生死入り混じった世界なら、我々だけでなくソウルソサエティの応援も欲しい」

ルキアは全員を順に見ながらいう。

「ワタシも賛成ですね」

浦原が翼の傷を見ながら言う。

「仮にも翼サンがやられた相手だ。油断はできません」
「ああ・・・分かってるよ浦原さん」

一護も賛成のようだ。

「よし！それじゃあわしが呼びに行こう」

夜一はスツと立ち上がる。

「すみません。夜一さん」

「なあに、気にするでない！」

そういつて夜一は部屋を出て行った。

「俺たちは他に被害者がいないか外へ行こう」

翼がそう言った時だった。

「あ———！！」

一護が叫ぶ。

「んだよ・・・うるせえーな」

翼があきれたような表情で一護を見る。

「今日祭があるんだよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！」

「では・・・祭があるということとは・・・」

「奴が現れる可能性が・・・高いということですね」

「そんな・・・！」

（誰が誰だかは読者の皆さんにおまかせするので・・・）

「じゃあ・・・俺たちは祭に紛れ込んで、奴を探す・・・ということとでいいな？」

「ああ・・・それしかねえからな」

「…………そのまえにソウルソサエティからの応援を待とう」

（10分後）

「すまぬな一護、遅れてしもうた!!」

夜一は頭の後ろをカリカリ搔きながら部屋に入ってきた。

「いや……別にいいけどよ……いったい誰が来たんだ？」

この時点で織姫はすでにたつきのところへ行ってしまった後なのだ。

「ほれ、こんだけじゃ」

夜一は親指で後ろをさす。後ろの障子を開けて出てきたのは、

碎蜂

吉良

雛森

白哉

恋次

修兵

日番谷

一角

雪菜

黒丸

が来た。

「いやいや……こんだけって十分な人数じゃねえか……」

一護が右手をブンブンと振る。

「まあいいじゃないか」

と、茶をすすりながら翼は言う。

「そうだぞ一護！隊長3名 福隊長5名 3席が2名も来ているのだぞ！！」

文句をたれるなうつけが！！」

ルキアの鉄拳を喰らった。

[illegible]

頭を押さえる一護。

「喧嘩けんかはそこまでだ。とにかく俺は時間が惜しい。先に行くぞ」

日番谷は縁側から外へ行く。

「あ、待ってよ日番谷くん！」

「日番谷隊長！！はやいっすよ！！」

雛森と一角が、日番谷のあとを追う。

「恋次・・・私たちも行くぞ・・・」

「はい、隊長」

白哉と恋次に続いて、吉良と修兵も後を追う。

「わしは碎蜂とゆくぞ」

「どこまでも付いて行きます！！夜一様！！！」

夜一と碎蜂も出て行った。

「さあゝて・と、俺たちも行くか！黒丸！雪菜！」

「おう！」 「ええ！」

翼も義骸を抜け、一護に「じゃな！」と言ってから出て行った。

「ルキア！俺たちも行くぜ！！」

「うむ！！」

出て行こうと、立ち上がったときだった。

「ちょっと待ってください」

浦原が、懷に手を入れ何かを出してきた。

「これ———持ってってください」

渡されたのは妙な機械だった。

「浦原、これは？」

受け取ったルキアは指をさして聞く。

「霊圧探査機です。きっと奴の居場所も分かるでしょう」

「すまねえ、浦原さん」

「いいんですよ。では、お二人ともお気をつけて——」

二人はうなずき、外へと出て行った。

伍の書（後書き）

いつもありがとうございます！夜代衣です！！
皆さんのおかげで夜眠たくても頑張れます！！

BLEACHファンの皆さまに余計な豆知識。

広島県では、日曜午前5時からBLEACHやってるんですよ

——マジ死ぬって 朝早くおきなくちゃ♪

六の書

〽日番谷グループ〽

「ここが祭の会場か・・・」

3人は、もうすでに人で賑わった神社に続く道を義骸で歩いていった。

「しっかしまあ奴がどっから出てくるか分かりずらいっスね」

「もっと人が少ないとこじゃないと直ぐに反応できないよね・・・」

一角と雛森も人を避けながら神社に向かっていった。

「桑ヶ谷の話によれば狙われているのは子供だけらしい」

「なるほど、子供がいなくなればそのせいで混乱を招く。そして、奴はそこを狙って

大量虐殺をするきか・・・」

一角は顎に手を当て考える。

「魂魄の悪循環を起こし、世界の破滅————」

雛森も険しい顔つきで、歩き続ける。

「それをさせねえのが俺たちの役目だ。護廷十三隊の名に恥じぬようにな」

日番谷は首だけ軽く振り返り、二人に言う。

「はい！」「うん！分かってる」

3人は歩みを止めず、ただただ前へ向かった。

く白哉グループく

「隊長、裏から行ってますけど・・・いいんスか？」

恋次が白哉に聞く。

「構わぬ。あっちには日番谷隊長がいる。我々は裏から周り奴の逃げ場をなくすのだ」

裏とはいっても同じく祭会場になっているが、神社は前からしか入れないので、遠回りになる。もし参拝の最後尾に行こうと思ったら、神社を横切り、階段を降りなくてはならないのだ。

「朽木隊長、もう直ぐ神社です」

修兵が指をさす。

「あのへんはここに比べたら賑やかですね」

吉良も上を見ながら歩く。

「……無駄口を叩いている暇はない。翼の話が本当なら、奴はほぼ間違いないここに現れる……」

白哉に言われ全員が足を少し速める。

(まだ……くんじゃねえぞ……!!)

恋次はそう祈りながら上を目指す。

〽零番隊グループ〽

「俺たちは横から……か」

翼は、獣道を登っていく。

「こんな街中でも獣道ってあるものなのね」

雪菜は街中にもかかわらず、大きな山があることに、少々驚いていた。

「にしても歩きずれえな」

一番前を歩いていた黒丸が、邪魔な草や枝を斬魄刀で切りながら進んでいく。

「文句を言うな。もう頂上だ!」

翼の言うとおり、もう頂上付近だった。

「急ぎましょ」

二人は雪菜に軽くなずき、一気に上まで言った。

く夜一チームく

「わしらも横からだな」

「そうですね、夜一様」

こっちの道は、翼達とは違って抜け道に使われているので、道はいほうだ。

「しかし・・・生死の入り混じった世界にし、世界を滅亡させる・・・

それは自分も消えるということではないでしょうか？」

「確かに、わしもそれが気になっていたのじゃ」

夜一は顎に手を当て、考える。

「とにかく、やるだけやるのじゃ」

「はい！夜一様！」

二人もまた皆と同じように上を目指した。

六の書（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました

七の書

「全員集まったな・・・」

翼の言うとおり、全員が神社に集まった。

「行く途中で妙な霊圧もなかったしな」

日番谷が言う。

「どこかで義骸を脱いで戦闘態勢を取っておきますか？兄様？」

「いや。ここでは迂闊^{うかつ}に手が出せぬ。それにこの群衆の中、どこに義骸を置くというのだ」

白哉の指摘にルキアは黙り込む。

「確かにそうかも知れねえな」

恋次は白哉の意見に同意する。

「・・・申し訳ありません、兄様」

「気にするな」

「なあ、この霊圧やつじゃねえか？」

一角は天を仰ぐ。

「そういえば・・・さっきからこの辺に変な感じがする・・・」

雛森も少し怯えた表情で辺りを見る。

「・・・チッ!!もう迷ってるヒマすらねえ!!おいルキア!コンもってきてつか!？」

「うむ!持ってきておるが・・・どうするのだ?」

そう言うのと、翼が地面に何か細長いものを落とした。

「それは・・・チャッピーやキング・・・!!」

義魂丸^{ぎこんがん}である。

「一護にはコンを使えばいい。俺たちはコレを飲む。—————これでいいんじゃないか?」

翼は全員に適当に義魂丸を渡す。

「ルキア!コンを」

「それ」

ポイツとコンを投げ飛ばす。

「姐さん酷いッスよ!!でも翼さんならいいッス!!」
「調子にのんな」

翼は容赦なくコンの腹を殴る。

「オェぶ!!」

その途端^{とたん}コンの口から義魂丸が飛び出た。

「ホレ！一護」

ヒョイッと投げた義魂丸を受け取った一護は、「バッチイ・・・」
といいながら拭いていた。

人形はルキアの鞆の中につっこむ。

「さっさと飲んでいくぞ！！」

『おう！！』

全員が受け取り飲む。

—————翼だけ別のものを飲んでいた。

死神化した修兵が、それを見て翼に問う。

「おい翼！何飲んでんだ？」

「桑ヶ谷製薬特製一時的本人同一義魂丸だ。」

「桑ヶ谷さんだけズルイですよ！！」

吉良が反応する。

「だまれ」

あっさりそう返す翼。

「えげつねえ・・・」

一護と恋次が声をそろえて言う。

———その時だった。

「翼!！」

雪菜が翼の近くに瞬歩で現れる。

「なんだ？何あわててる？」

「奴が間違はなくこっちに向かっている!！」

全員に緊張の色が走る。

「黒崎の読みどおりだったようだな・・・」

日番谷が、瞬歩で鳥居の上に行く。それに続いて雛森が上に行く。

「行くぞ！雛森！」

「うん！」

二人は奴を人気の少ないところに連れて行くために、奴の霊圧が感じられるところに向かっていった。

「我々は四方から奴を狙い、囲むのだ」

「はい！隊長！」

「私たちは・・・ここに結界を張ろう」

碎蜂と夜一は、東西に別れ、結界を張る準備に取り掛かった。

「じゃあ・・・俺たちは日番谷隊長たちの援護に行ってきます」

修兵はそう言って、吉良と一角を連れて日番谷の後を追った。

「私たちは四方八方を囲みましょう、兄様」

白哉は軽くうなずき、踵を返した。

「先に行くぞ」

白哉は瞬歩で行ってしまった。

「よっしゃー！！俺たちも行くぜ！」

「ああ、もちろんだ！」

「いくら強くても望むとこだぜ！なあ！翼」

「あいつ・・・俺に怪我させたこと後悔させてやるぜ！！」

「そんだけ強えー奴なら殺^やりがいがありそうだな」

「あたしも楽しみだわ」

それぞれ瞬歩で去っていった。

八の書（前書き）

ずいぶんおそくなってすみません（＞＜）！！
待たせた割に文少なくてすみません！！！！
今度からはなるべく早く更新いたします。
では！どうぞ！

八の書

結界が張られ、どんなに暴れても大丈夫といった状態になった。

「このあたりまで追い詰めればいいだろ」

日番谷は氷輪丸を奴に向ける。

「もう逃げられない・・・」

雛森も斬魄刀、飛梅を構える。

修兵・吉良・一角も各々（おのおの）抜刀して奴を見据える。

「この私に勝てるっても？」

奴は薄ら笑いを浮かべて、死神衆を見る。

「あたりまえだ。てめえがこの世の破壊を望むなら、俺たちはそれを止めるのが仕事だからな」

日番谷は、氷輪丸を掲げる。

「霜天に座せ・・・氷輪丸!!」

氷の龍が奴めがけて飛んでいく。――が、軽々と破壊された。

「こんなものか？」

奴がそういった時だった。

「弾け！飛梅！！」

紅蓮の弾が、奴めがけて飛んでいく。そして大爆発を起こした。

「面を上げろ・・・侘助」

煙の立ち上がる中、吉良は瞬歩を使い奴に攻撃を仕掛けた。
刀には血がべったりとくっついていた。

（手応えあったな）

そうおもった。

「いけ！鬼灯丸！！」

いつの間に始解したのやら、鬼灯丸で、一気に攻撃をする。鮮血が
あちこちに
飛び散る。

「刈れ！風死！」

鎌ヌンチャク型になった風死を振るう。後のことは吉良と一角の
きと同じである。

「氷輪丸！！」

氷の龍が未だに煙が立ち上る処へ突っ込んでいく。

一際強い風が吹き、煙が晴れていく。――その先にあったの

は・・・・・・・・

「なん・・・・・・・・だと!？」

氷の中には誰もいなかった。氷輪丸は何かに当たったから凍りついたはずなのに、そこにあったのはただの巨大な氷の塊だった。

「どうなって・・・・・・・・!!?」

雛森が言い終わらないうちに言葉を切る。

「雛森い!!!」

日番谷が叫ぶ。

――全員が見たものは、心臓あたりを刀で貫かれた雛森の姿だった。

「か・・・・・・・・・・はア・・・・・・・・ツ!!」

一気に刀を抜かれ、大量の血が流れ出る。

「雛森!!!」

修兵が、風死を雛森に向かって放ち、腰あたりを鎖で絡めとり自分の方へ引き寄せた。

「雛森君!しっかりするんだ!!」

必死で呼ぶ吉良の声も、だんだん聞き取れなくなった。

「・・・・・・・・く・・・・・・・・ん」

雛森が誰かを呼ぶ。

「日番谷隊長を呼んでるみたいっスよ」

一角が日番谷を呼ぶ。

「雛森・・・・・・・・!!」

「日番谷・・・・・・・・くん・・・・・・・・そこに・・・・・・・・いるの・・・・・・・・?」

雛森は、もう目の前が真っ暗だった。

「ああ・・・・・・・・」

日番谷の返事には怒りの色が隠れていた。

「気を・・・・・・・・つけて・・・・・・・・あいつには・・・・・・・・カハアツ!!」

「雛森!!」

多量の血を吐きながらも、苦しそうに言った。

「あいつを・・・・・・・・上回る・・・・・・・・霊圧が・・・・・・・・」

言い終わる前に意識を失った。

「・・・・・・・・てめえ・・・・・・・・ぜってえ絶対に許さねえ!!!!!!」

日番谷は再び奴に向かっていった。

八の書（後書き）

BLEACHクイズ！！

問題！（チャ〜ラン！！）

キメラバールカ
混獣神のアヨンは、誰のペットで
何から作られているでしょうか？

答えは次回の小説の前書きにあります。

仇の書（前書き）

前回の正解は ミラ・ローズ スンスン アパッチの左腕から作られた三人のペットです。

仇の書

「卍解!!!!」

日番谷は、怒りのままに卍解をした。

「大紅蓮表輪丸!!」

氷の羽を背にまとい、一氣にあたりを冷たくさせた。

「喰らえ!!」

氷の龍を何匹も何匹も飛ばしていく。

「……哀れ」

奴は全ての竜を叩き落す。

「なに!?!」

「弱いのだな……隊長でも」

「氷輪丸!!」

空気中の水分を凍らせ大量の氷柱を作り出す。

「千年氷牢——」

ガチャァン……奴は中に閉じ込められたと思ったが、

「なめてんのか……?こんな攻撃効くわけないだろ」

やはり奴は簡単に壊していく。

「くっ……！」

構えなおした日番谷の前に、修兵と一角がいた。

「な……！！どけ！おまえら！」

「何いってんスカ日番谷隊長」

「そうッスよお！！一人だけいいところ取りは無しッスよ」

二人は斬魄刀を構える。

「雛森は今吉良が見てます。……隊長も行ってください」

日番谷はうなずいた。

「……気をつけろ」

「言われなくても！！」

そう答えた後、一角が飛び出していった。

「おらぁ！！」

奴に片手ではじかれる。

「風死！！」

修兵が風死を振るう。一角同様、弾かれた。

「これじゃあ・・・きりがねえ・・・」

〵日番谷・吉良〵

「雛森の様子は？」

「危険な状態です。治療してますが・・・奴の霊圧が邪魔をしてうまく行かないんです」

荒い呼吸を繰り返す雛森に何もできないことを二人は嘆いた。

「氷輪丸」

日番谷がつぶやくと、雛森の傷口を氷でふさいだ。

「どうすれば・・・!!」

吉良が必死で治療してもなくなるのは自分の霊力だけだった。

—————そのときだった。

「日番谷! 吉良!」

二人の直ぐ近くから、翼が瞬歩だ現れた。

「桑ヶ谷さん・・・!」

吉良が身体を半身ずらし、翼に見せた。

「雛・・・!! 分かった。しばらく奴はテメェらに任せるぞ」
「あぁ」

日番谷は少し二人を見てから奴のほうへ駆け出した。吉良も続いた。

「直ぐ直してやるからな」

翼が傷口に手をかざす。

「—————^{けいかつ}啓活!!!!」

一気に傷が治ってゆく。

「こんなもんかな・・・さてと」

すくつと起き上がる。

「俺も奴を倒しに行くかな」

翼も駆け出した。

仇の書（後書き）

遅くなってごめんなさい！！テストがあつて！！
学生はつらいッス

「バトル少女」という小説を書きました。良かったら見てください。

拾の書（前書き）

7月15日は一護の誕生日!! 皆でお祝いしよう!! ハッピーバースデー一護♪

拾の書

「つ・・・よい」

一角と修兵は、地に伏したまま動けなかった。
そこに現れたのは――――

「二人とも大丈夫か!？」

翼が駆け寄ってきた。

「翼・・・・・・・・」

「あいつだな？」

「ああ・・・奴は強いぜ」

「まかせろ」

一角と短い会話を済ませ奴に向かっていった。

「破道の三十一・・・・・・・・・しゃっかほう赤火砲!！」

ドオオオオオオオオオオ、と大きな爆発音がした。その時だった。
ガキイイイイイイイイン!! と刀と刀が触れ合う音がした。

「見えてんだよ」

翼は電光石火の速さで刀を抜き、自分の背の方に刀を持っていたのだ。

「・・・・フン!! これで終わったらつまらぬわ!!」

奴はギャンと刀をはじき翼と距離を取る。

「………終わりか？」

「そんな訳なからう」

二人は再び刀をぶつける。

「はくせんげき白斬撃！！」

手足に火をまとい、一気に攻撃を仕掛ける。

「甘い！！」

サツとかわされてしまった。

————二人が闘っているときだった。

「翼！！」

白哉、一護、恋次、雪菜、黒丸が駆けつけた。

「おまえら……手えだすなよ……」

「なに言ってやがんだ！！」

一護が反論した。

「お前一人で……」

「てめえらが手を出しても勝てねえんだよ！！」

翼が少し振り向いたときだった。

「だから貴様らは甘いんだ」
「しま——」

全てを言い終わる前に胸を貫かれた。

「翼——」

黒丸と雪菜が走り出す。

黒丸が刀を抜き、大きく跳躍した。

「輝け——！黄金丸——」

一边は真っ直ぐで一边はカーブしていた。刀の大きさは十寸（約三十センチ）と小型で、柄も鐔もない。一边が真っ直ぐなほうに一箇所くぼみがあり、そこに棒がある。

それがこの斬魄刀の柄のようなものだ。そして、後ろから鎖が出ていて、その先に小さなクナイがついている。

雪菜も抜刀する。

「咲け——！紅花——」

鐔が花びらのように開き、刀先が緑色に変色したかと思うと、うねり・そして地にもぐった。

鐔と柄だけになったが、これがコントローラーの役割を果たす。

「はあ——」

黒丸は鎖を持ち刀を投げる・・・が、難なくかわされてしまった。

「まだよ!!」

雪菜は刀を振り上げるすると緑色のつるが奴を囲む。

「ふん」

やはりこれも難なくかわされてしまった。

「くっ・・・」

「なんて奴・・・」

二人が構える。——とその時だった。

「手え出すなって・・・言っただろうが!!」

翼が振り向き二人に言う。

「翼!？」

「流石隊長だな・・・お目覚めが早いことで」

「フン! てめえに言われても嬉しかねえよ」

「そうか・・・」

そういつて奴は翼を投げる。

手を付いて着地する。

「お前・・・大丈夫なのか？」

一護が不思議そうに聞く。

「ああ・・・直接作用したのは俺の内なる世界だ」

翼は言ってその場に倒れこんだ。

「まあ・・・これくらいでいいだろ」

奴もどっかに行ってしまった。

拾の書（後書き）

BLEACHクイズ！！（チャ〜ラン！！）

問題！！BLEACH単行本で藍染の藍が愛になっているところがあります。それは何巻目でしょうか？

拾巻の書（前書き）

答え 24巻でしたゝ

拾巻の書

「どこも目を覚ましませんね」

ここは浦原商店。そして今のは浦原。

「翼の奴・・・大丈夫かのお？」

夜一を心配そうに覗き込む。

数秒の沈黙。

その沈黙を破って話したのは一護だった。

「あいつ・・・直接作用したのは自分の内なる世界だ・・・って言った」

「・・・なるほど・・・皆サンちよっとここで待っていてください」

浦原は裏に消えていった。

「雛森も気になるしな・・・」

日番谷がボソつとつぶやいた。

～数分後～

「はぁ～♪できましたよ皆サン。これで内なる世界に入り込めます」

持ってきたのは意味不明な機械だ。

「・・・あの・・・浦原さん・・・なんスカこれ・・・」
「いったでしょー内なる世界に入るための機械です」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員の顔が曇った・・・気がした。

「これで翼サンの内なる世界に行ってみようって訳です」

やっと全員理解したようだ。

「しかし・・・入れるのは3人までです。誰が行きますか？」

真っ先に立候補したのは・・・

「わしが行こう^ゆ」

夜一だった。

「俺たちも」

「行くぜ！」

一護と恋次も立ち上がる。

「決定ですね・・・じゃあ早速行って来て下さい」

そう言うなり機械のスイッチを押した。

「う・・・・・・・・うわあああああああ！！？」

3人は眩^めい光に吸い込まれるように消えていった。

—————そのとき雪菜がボソツとつぶやいた。

「たしか・・・翼の内なる世界って焼け野原・・・」

全員が（絶対言うの遅い！）と思った瞬間だった。

く内なる世界く

「あつつつつつちいい！！！！！！」

一護が叫ぶ。

「なんだよこの世界は・・・」

恋次も汗をうっとおしそうに拭^{ぬぐ}う。

「確かにのお・・・」

夜一も相当暑そうだ。

それもそのはず・・・焼け野原に火の海・さらに火山という火に関係するものばかりだ。

「にしても・・・どこにいきやいんだ？」

「うーむ・・・流石に火の海は無理だよな？一護」

「なんで俺に振るんだよ！！」

「煩いぞ！とりあえず火山に向かってみるのじゃ」

「ういゝす」

3人は火山に向かった。

ゝ火山ゝ

（なんだ・・・？死神の気配がする・・・誰だ？我達の世界に入るものは）

マグマのなかで竜火が翼をいたわるように傍にいた。
翼は眠っていた。

「おい！竜火！いるのじゃろ？でてこぬか！！」

夜一の呼ぶ声に反応し、竜火が出てきた。

『お主たちは・・・』

「翼がここにおるのじゃろ？」

『ああ・・・いるぞ。だが今は眠っておる。早くここから去れ！さもないと・・・』

竜火の尾が五つに枝分かれした。

『お主たちを・・・焼き尽くす！！！！』

一気に周りの温度が上がる。

「待ってくれ！！」

一護が竜火に訴えかける。

「俺たちは翼がどうなったのか、無事かどうかを見に來ただけだ！
」

竜火は耳を傾ける。

「教えてくれ！翼は無事なのか！？」

竜火は尾をまた一つに戻し、ゆっくりと一護の傍へ降り立つ。

『案ずるな・・・奴の攻撃を受け、翼の意識がこちらに閉じ込められただけだ。』

翼の霊圧なら直ぐに目が覚めるだろう』

「そうか・・・良かった」

恋次も胸を撫で下ろす。

『翼に会うか？』

「え！・・・いや！でも・・・あいつはマグマのなかなんだろう？そんなところにどうやって！！」

『案ずるな・・・我に掴まれ』

全員竜火に掴まった。

『では・・・まいるぞ！！』

一気にマグマに突っ込んだが、不思議と暑くなかった。

——その奥には翼が眠っていた。

『心配は無用だ。だから主らは早く帰るが良い。翼が目を覚ましたら閉じ込められるぞ』

「ああ。恩に着る」

夜一がそういったあと、あの時のような眩い光が三人を包む。

（浦原商店）

「うわああああああ！！！！」

ドシーン　とハデに尻餅をついた。

「い・・・てててて・・・あれ？帰ってきた」

「一護！危ねえ——！！！」

「え・・・ギャ——！！！！！」

恋次が一護の上に落ちてきた。

「まったく・・・主らは何をしておるのじゃ・・・」

夜一が二人の直ぐ傍に降り立つ。

「おかえりなさいい♪・・・で、どうでしたか？」

「直ぐに目を覚ます・・・心配無用じゃ！」

全員に安心の色が浮かんた。

拾巻の書（後書き）

BLEACHクイズ!!（チャ〜ラン!）

一護の好物は？

新たな仲間（前書き）

答え 明太子とチョコレートでした。皆分かったかな？

新たな仲間

「あんっつの野郎……絶対許さねえ……ぜってーに」

翼から黒いオーラが立ち上った……気がした。

「ま……まあとりあえず目が覚めたんだから良かったじゃねえか」

恋次がそのオーラに若干ビビリながらも言った。

言い忘れていたが、今ここにいるのは一護・恋次・翼・ルキア・黒丸・雪菜・夜一・浦原・碎蜂だけだった。

吉良は業務の残りをするために帰った。雛森は治療をするために、日番谷は雛森についていった。白哉は恋次の分の仕事もまとめてするために帰り、修兵は原稿を仕上げるために帰った。

一角は———— 十一番隊のたまった仕事のために帰ってしまった。

「さて……これからどうするかろう？」

「また奴の居場所が分からなくなってしまったものね」

「奴をおびき出す方法すら分からねーのになあ……」

全員がまた腕を組んで考える。

黒丸が何か思いついたのか、翼に「なあ」と声をかける。

「あっ？何だよ？」

「あの卵・使えるんじゃないか？」

翼が懷に手を入れ何かを探している。すると出てきたのは、鶏の卵よりも小さい卵だった。

「何だよその卵？」

一護が胡散臭そうに聞いた。

「実験で作ったんだが・・・地獄蝶と死刑囚になった死神と虚を混ぜたもんだ」

「また・・・変なもの作りましたねー」

浦原の言うことにも一理ある。

「まだ孵化させておらぬのか？」

「ああ。だが霊圧をこうやってこめれば・・・」

翼の手のひらから赤い光が徐々に卵へと移っていく。
そして――――

ピキピキッと卵にひびができた。そして、眩いほどの光があたりを包み込む。

「な・・・何だ！？これは！？」

碎蜂が驚くのにも無理は無い。産まれてきたのはただの地獄蝶だ。

「もっとこう・・・すげえもんが産まれてくると思ったぜ・・・」
「

恋次はグロテスクな物が産まれてくると思ったらしい。

「そんなものには産まれませんか」

全員に？マークが浮かび上がる。

「誰だ？今しゃべったのは」

翼があたりを見渡すが、全員自分は違うと目で訴えた。

「私ですよ。私」

喋っていたのはさっきの地獄蝶だった。

「こやつ・・・喋れるのか!？」

ルキアがそーっと手を近づける。

ルキアの指に蝶が乗った。

「喋れますよ。死神を混ぜたおかげでしょうかね」

蝶はおっとりとした女性の声で喋っていた。

「こやつに何か名前をつけてやらんとな」

夜一が蝶を指に乗せながら言う。

「そう言っても・・・何が良いんだか」

「そうだ!揚羽アゲハでどうだ？」

ルキアの提案に皆賛成した。

「じゃあお前は今日から揚羽だ!!」

一護がそつと揚羽を指に乗せる。

「・・・よろしくな揚羽」

「はい。よろしくです」

揚羽もその名前が気に入ったのか嬉しそうに飛び上がった。

新たな仲間（後書き）

更新遅くなってすみませんでした・・・。
反省してます。（これは本気で）

次回も楽しみにしてください！！

壱参の書

「まあ実際、揚羽がどんなことができるのかは俺も良くわかんねえ」

翼の一言に全員がずっこけた。

「にしてもこ奴・・・これと言って大きな力は感じられぬが・・・」

夜一の言うとおり、確かに死神と虚を混ぜたとは思えぬほどその力は弱い。

「―――やっぱり使えない？」

そう思ったのは一人二人ではなかった。

「失礼な！私^{わたくし}だって何かしらできますよ」

揚羽が怒り気味の声で言う。

「にしてもどうするかなあ」

全員がまたしても考えを巡らせる。翼だけは神経を集中させる。

「―――ここから東226のあたりに変な霊圧があるぞ」

「！！おい翼！！そこはレイディアンが封印されている処^{ところ}ではないか！！」

碎蜂が立ち上が声を張り上げる。

「れい・・・でいあん??？」

一護は話についていけない。

「レイディアンとは、600年ほど前だったか———現世・ソウルソサエティ二つの世界を支配しようとした破面フランカルの名だ。あ奴は護廷十三隊全隊長の力を持って封印させられた。よもや目覚めることなど無いはずだ。だが………」

「だがなんだよ？」

ルキアに変わり恋次が話した。

「今あいつが目覚めるというのは一番まずい。隊長3名が抜け、副隊長一人が戦闘不可能だ。こんな状況じゃあ封印どころか奴に手傷を負わせるのも難しいかもしれねえということだ」

「レイディアン………」

揚羽が何かを知ってるような口ぶりで名をつぶやく。

「揚羽、あなたしってるの??」

「どこかで聞いたことあるような………」

「雪菜！揚羽！話は後だ。今はレイディアンの封印場所に向かう」

全員が立ち上がった時だった。一護の懷で何かが音を立てていた。

「ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！」

「うおっ！！何だよ!？」

一護が懷から取り出したのは浦原が渡した機械だった。

「何かに反応してますね」

浦原は一護から機械を受け取りボタンを押す。

「東226に巨大な霊圧を確認……付近の空間に歪^{ゆが}みがしよ
うじ……結界が破壊しかけています」

ピーザー……

機械が動きを止め画面が暗くなった。

「こうしちゃいれねえ!! いくぜ!」

『ああ!!』

全員（浦原以外）は瞬歩でその場を去った。

く東226 空座東山く

そこでは奴が結界を破壊しようと霊圧をあてている。

「ちっ。めんどくさい結界だ」

奴はレイディアンを結界から出そうと無限に霊圧をあて続ける。

「そこまでじゃ!!」

夜一を先頭に碎蜂↓翼↓黒丸↓恋次↓雪菜↓ルキア↓一護&揚羽
の順でその場に来了。

「てめえに逃げ場はあたえねえ」

翼は一步前に出て奴を見据える。

「レ．．．イディ．．．アン．．．！！！！」

「ん．．．？この霊圧は．．．」

レイディアンは揚羽に不適な笑みをみせる。

「懐かしいなあ！そうだろ？フレア・ディアル！！！！」

「あなたも．．．元気そうですね。デアロ・ビスマルク」

二人は互いに名を呼び、睨み合った。

壱参の書（後書き）

ちわっす夜代衣っす。

BLEACHアニメでオリジナル始まったねゝ

それ記念して今回からここは死神図鑑ゴールデンデンを始めまーす！！！！

コン「よ！元氣かてめえゝら！！今回はこの小説のオリジナルキャラ！桑ヶ谷 翼だどーぞーう！！！！（イエエゝイ）」

T「うっせーなあゝ」

K「ちよっ！！翼さん！！そのそっけなさやめてください！！！」

T「へーへー。で、さっさとやれよ。」

K「は・・・ハイイ・・・。で・・・ではまず一つ目！！」零番隊の4席5席は誰ですか？”だそうですけど・・・。”

T「いつか分かんたら」

K（テキトーだ！！）

K「氣を取り直して次！」翼さんは現世ではどこに住んでいるのですか？？”だそうですけどどうですか？”

T「幽霊屋敷って言われているデッケー屋敷にすんでんだ。小高い丘の上にあるんだぜ。そこに住んでんだ」

K「すごいとこっすねゝ」

K「これが最後ッス！！」翼さんの3サイズは！！！」

T 「焼き尽くせ!! 竜火!!!!」

K 「ギィヤアアアアアアアア!!!!」

T 「絶対^{ぜってえ}テメエが考えてんだろ。変態ヌイグルミ」

K 「スマセンデシタ」

拾四の書（前書き）

遅くなってスミマセン。

かなりおそくなってスミマセン。

ほんと反省してます。ハイ

ではどうぞ

拾四の書

「揚羽・・・お前知ってんのか？」

一護が心底驚いた表情で言う。

「えっ？あの・・・私わたくし・・・どうしたのでしょうか？記憶が一瞬飛んだような・・・？」

揚羽はまったく覚えていない。

「記憶がないだと・・・？フン、まあいい。こっちにとっては好都合だからな！！」

奴————デアロは高らかに笑う。

「————てめえが何したいかとかはどうでもいい」

翼は一步静かに歩み寄る。

「そこに封印してある奴は俺レイディアンの父さんが封印したやつだ。今貴様が封印を解くというのであれば————」

グツと死覇装しはくしょうと羽織を掴んだ。

「ぶっ殺す！！」

バツと死覇装を脱ぎ捨てた。

下には刑軍の戦闘衣装に似たものを着ていた。

大きな違いは背中の中にある・・・ということくらいだ。

「貴様が私を殺すだと？前は一度も私に攻撃を喰らわすことができなかったではないか？」

「馬鹿かてめえは・・・俺がいつ本気を出した？俺はあん時10%も力を出してねえんだよ！！！」

翼は高く跳躍し、鯉口を切った。

「・・・！！おい！レイディアン封印が・・・！！！」

刀を抜くほんの直前だった。
カッと結界が解けた。

「しまった！！レイディアンの結界が！！！」

全員が眩い光に目を細める。

「な・・・なんだあ！？」

恋次が光に慣れてきた目で結界があった社やしろを見る。

そこにいたのは小柄で美しい女性だった。割れた仮面からは桃色の髪と淡い橙の瞳が見える。

「私は・・・どれだけ眠っていたのかしら？」

橙の瞳がデアロに注がれる。

「はっレイディアン様。およそ600年ほど前でございます」

レイディアンの前で方膝をついていた。

「そう・・・」

レイディアンは腰に結わえてあった刀を抜く。

「・・・あのころは失敗してしちゃったけど」

刀を構える。

「今度こそ・・・二つの世界を私の物に・・・!!」

「はっ!!? しかし、レイディアン様は最後にこんな世界壊してしまえと・・・?」

「昔は昔、今は今よ? さあ・・・行くわよ!!」

「はっ!! 仰せの通りに!!!!」

二人の刃は一護たちに向けられた。

「とくに私を封印した死神が気に食わない・・・」

橙の瞳が一瞬憎悪が浮かんだ。

「ふふ・・・今は許してあげる。だって私も復活したばかりでまだ力がでないの。・・・だからここでは戦わない。そのかわりソウル・ソサエティを襲うわ」

桃色の短髪が、風でふわりと揺れる。肩まである仮面の角がその髪の下からチラチラ顔を覗かせる。

「それをさせぬのが我々の役目だ」

碎蜂の温度のない声が響く。

「その通り。ソウル・ソサエティに行かせる前にわしらで決着をつける」

夜一もスツと構える。

「あら？今の私でもあなた達は指一本触れることはできないはずよ？」

レイディアンは小さな笑みを浮かべるが、目が笑っていない。

「んなもんやってみなきゃ分かんねえだろうが！！！」

一護が斬月を振り上げる。

「月牙天衝！！」

斬激が飛ぶ。

攻撃がぶつかる直前・レイディアンとデアロは笑んだ。

ドカーン！！

派手な音が辺りに響き渡る。

ごうごうと巻き上がる土煙が次第に晴れてゆく。

—————そこにレイディアンの姿は無かった。

「逃げられた・・・ようね」

雪菜は二人が先ほど立っていた場所に行き、霊圧の名残を確かめる。

「まさか・・・ソウル・ソサエティに逃げたんじゃ・・・」

黒丸の言葉に皆、唾をのむ。

「そうなりや追いかけるだけだ」

翼が降りてきて羽織と死覇装を乱暴に拾い上げ、羽織る。

「それ以外方法はなさそうだな」

「そうと決まりやあさっそくいこうぜ！」

全員、再度浦原商店へ向かう。

「準備はできてます。――さあ、急いで」

「すまぬ浦原。恩に着る」

「俺は揚羽と共に行くから一護達とは別ルートだ。・・・気をつ
けろよ」

「ああ」

短い会話を済ませた後、翼は肩に揚羽を止まらせる。

「では、あちらで合流しよう」

「おう」

全員、門へ飛び込んだ。

全員が合流した場所は貴族の住む屋敷が並んでいるところだ。

「ここには下級貴族しかおらぬ。上級貴族や四大貴族は中心部のほうじゃ」

夜一が簡単な説明をする。

「夜一様。私は刑軍し指示を出してきます。総隊長には・・・」

「わしから言っておこう。一護・ルキア・恋次・翼は搜索を続けてはくれぬか？」

「おう！任せてくれ夜一さん」

一護はドンツと胸を叩いて見せた。

「雪菜、黒丸・・・楓と剣山に連絡しとけ。封印準備ってな」
「ええ。すぐに連絡するわ」

雪菜と黒丸はその場を瞬歩で離れた。

翼は羽織と死覇装を羽織ったまんま身体を軽く伸ばす。

「さて・・・今回はどうなるんだかな・・・」

翼の少し楽しそうな声は逆にゾクつと寒気さえ感じさせた。

拾四の書（後書き）

くラジコンゴールデンく

K「よう！久しぶりだなてめえくら！！今日は時間がねえからとつとと始めるぜ！！さあ！今日のゲストは朽木 白哉&阿散井 恋次の六番隊ペアだドローゾー！！」

^{びやくや}B「・・・よろしくな」

^{れんじ}R「おうす」

K「もつとシャッキつとしやがれ！！じゃあさつそく質問行くぞ！」

R「もう眠いからはやくしろよ」

K「分かってるよ！！えくと・・・」 白哉さんはなぜ恋次を副隊長にしたのですか？”だとよ”

B「・・・実力があつたからだ。兄は余計なことを聞くな」

K「はゝい・・・」

R「んっ？カンペ？」

カンペ【もう時間がないので続きは後日で】

R「はっ？」

K「んじゃあ・・・今日はここまで！じゃあまたな」

拾五の書

「さてと・・・本格的にどう動くか・・・だな」

恋次が一步前に出てきて言う。

「今ここにいるのは揚羽も合わせて5人。もし分かれるのなら2・2・1だな」

ルキアの提案に恋次は、

「2・3でもいいんじゃないか？」

といった。

「だってよ、揚羽はあまり戦力にはなりそうにねえから結局は2・2になるだろう？戦力は」

それを聞いた揚羽は、「失礼な・・・」とつぶやいた。

「そうだな、そうすつか。じゃあどう分かれるんだ？」

「クジでいいだろ」

一護の問いかけは翼の一言で終わった。

数分後

全員（揚羽も含めて）がクジを引き終わりこう決まった。

一護・恋次・揚羽
ルキア・翼

「なんで私がこんなむさ苦しい男といっしょなのですか・・・」

揚羽の言うむさ苦しい男とは、恋次である。一護は気に入っているようだ。

「てめえ・・・」

恋次がキレかける一瞬、警鐘が鳴り響いた。

『九番隊付近で異常霊圧確認。何者かが破壊活動中の模様。護廷十三隊に支援要請。繰り返し・・・』

けたたましい音と共に状況が知らされる。

「行くぞ。もう時間がない。一護達は西・俺達は東だ」

それだけ言うどルキアと共に瞬歩でその場から消えた。

「行動はええ・・・」

「いかにも翼らしいな・・・」

「さあ、行きましょう。私達にも時間はありませんことよ」

揚羽に言われ二人は顔を見合わせうなずいた。

「レイディアン・デアロ」

「だいぶ壊したなあ」

子供のような無邪気な笑顔でクスクス笑う。

「レイディアン様、死神が来ます」

デアロが言った直ぐだった。瞬歩で現れたのは修兵だった。

「やっと見つけたぜ・・・破面。隊舎をよくもメチャクチャにしやがったな・・・」

「あんたさっき九番隊に居た奴よね・・・。しつこい男は嫌われるわよ？」

「うるせえ!!」

修兵は高く跳躍した。

「刈れ・・・!!」

言いかけた時だった。触れてないのに修兵の肩に切り傷ができた。

（またかよ!!!!）

目をそらした時だった。後ろから何者かに刺された。

「レイディアン様にその刃が届くわけ無からう」

デアロの一撃は修兵を貫いた。

修兵は壁に叩きつけられそのまま座り込んだ。白い壁に赤い血で線がひかれる。

「所詮、死神もこんなもんなのね」

レイディアンはげんめつした、という表情でその場から立ち去った。

一護・恋次・揚羽

揚羽の小さな羽ばたきでも聞こえそうなほど辺りは静かだった。

「これは・・・」

恋次は目の前の光景に心底驚きを隠せない表情だった。それもそのはず、目の前の隊士達が血だらけで倒れていた。それも1人や2人ではなくざっと見積もっても20人近くいた。

一護も目の前の残劇に言葉をはっせなかった。

「まだ血が乾いていませんね・・・斬られてすぐってところでしょ」

揚羽は隊士たちの上を通って一人ずつ見ていく。

「全員同じですわ」

揚羽は一護の肩の上で言った。

「てことはついさっきここに来たということだな」

揚羽は一護の問いに答えるように羽を羽ばたかせてから足に靈力を溜め始めた。

「揚羽!？」

「まあ、見ていてください」

そう言って神経を集中させる。

「啓活」

静かな物言いで放った言葉。近くの死神の傷をゆっくり治していく。

(遅いけど、確実に治している……!!!!)

1分間で隊士の傷がほとんど治った。

その隊士に恋次が駆け寄る。揚羽は疲れたのかゆっくり地に落ちてゆく。それを一護が受け止めた。

「流石に死神の技は使えますね・・・」

「ごころうさん」

一護がやさしく撫でる。

後ろのほうでは恋次が隊士に話しかけていた。

「おい! しっかりしろ! おい!!!!」

「うう・・・」と小さな声で返事をする。

「良かった。気がついたみてえだな」

「あ・・・阿散井・・・副隊長・・・・・・・・」

「何があつた」

「二体の破面が・・・」
アランカル

「やっぱりか・・・詳しく教えてくれ」

「・・・はい。確かあの時は――――」

「破面めえ・・・どこへいったんだ・・・・・・・・」

倒れていた隊士・・・隊士Aとしよう。

他数人、4人といっしょだった。

つまり、5人で行動していることになる。1人は女性だ。

「まあまあ落ち着いて。アタシらの目的は破面を生け捕りにすることですよ？殺したりしたら隊長に実験道具にされちまうよ」

それを聞いた残り5人は震え上がった。

「されど、どうするんだ？ 見つかなかったら怒られるぜ？」

「まだソッチの方がましだけどな」

「グチグチ言っでないで探そうぜ」

A「そうだな。実験道具にはされたくねえしよ・・・」

数歩進み角を曲がった時だった。そこにはたくさんの隊士たちが血まみれで倒れていた。

「なんだいこれは・・・！！」

女隊士^{じょたいし}は目を見張った。まさに吐き気を催す^{もよお}光景だった。

「次の獲物は貴方たちかしら？」

後ろから響く冷徹な声。隊士全員が刀を構え振り向く。

レイディアンの口元は笑っているが目が笑っていない。正直言っ

て――――恐い。

A「貴様らか！！ 瀨霊廷に侵入した破面は！！！！」

「アタシ達がアンタ達を捕まえてやるよ！！」

威勢よく飛び出した2人のあいだを縫うように通り抜けるレイディアン。デアロは上を高く飛び、レイディアンの元へ飛び降りる。

「あ・・・」

小さくつぶやいた女隊士は、バツと後ろを振り返る。

後ろに居た3人の隊士は恐怖で臆してしまう。

A「逃げろ!!! 早く!!! 全員撤退だ!!!!!!」

隊士Aの掛け声で全員が瞬歩で逃げようとした。だがその前に隊士1人から血が吹き上がる。

「華音さん!^{かのん} 仁!^{じん} 逃げろ!!!」

切られた隊士をゆっくりと壁により掛けさせた隊士が隊士A・・・仁と女隊士・・・華音に向かって叫ぶ。だが2人は逃げることなく刃を破面に向ける。

「馬鹿野郎!!!!」

仁と華音を振り返った直後その隊士も切られた。

もう1人はデアロに貫かれ、そして投げ飛ばされる。

「もう貴方たちだけよ? 逃げないの?」

「逃げたって無駄だと悟ったから——————」

「アタシ達は逃げない!!!!」

「ふうん。意外と賢いのね。・・・^{エサクタ}正解♪その通りよ。逃げたって直ぐに追いつくから逃げたって無駄。でも立ち向かったって貴方たちは死ぬのよ?」

レイディアンは刀を抜く。

「捕らえろ・・・・・・・・・・」

それ以降の仁の記憶は無くなっていた。

「……というわけです」

「そうか……ご苦労だったな。4番隊に連絡しておく。直ぐに来るはずだ」

「すみません……」

「気にすんな」

恋次は一護と共にまた瞬歩で消えた。

拾五の書（後書き）

☆死神図鑑ゴールデン☆

K「よう！元氣かてめえらあ！！！前回の続きと行きたいトコだが！時間の都合で作者が省いてしまった！てゆーかあ！ゆうほど手紙が来てねえんだよ・・・」

Y「うっさい！！今何時だと思ってるのよ！！！！」

K「ギャー！！作者の夜代衣じゃねえかあ！！！！」

Y「何？コレ今収録中？」

K「そうッス」

Y「恋次達は？」

K「え！？省いたんじゃないんスか？」

Y「んな訳無いじゃん。確かに修学旅行で忙しいから時々忘れかけるけど恋次と白哉のことは忘れてないよ？」

カンペ「2人に連絡が付きません」

K「ん？2人に、連絡が、付きません・・・ておい！！！！」

Y「んじゃあまた今度か。皆々待っててね」

拾六の書（前書き）

夜遅くにちよくちよく書いていました。今度からもっと早くできるように頑張ります^^；

拾六の書

「で、結局あの後駆けつけた助っ人もやられてあの有様・というわけですね？」

一護と恋次が走っている最中、揚羽がそつという。

「そうらしいな」

それを返したのは一護だ。

「とにかく探すぜ。奴もそう遠くには行っていないだろう」

「とにかく行きますわよ。なるべく早く見つけなくては……」

2人と1匹は走り続ける。

（ルキア・翼）

「まったく……なぜ見つからないのだ」

ルキアはふう・と息を吐く。

「ったく……めんどくせえな」

翼は壁に寄りかかり伝令神機を打つ。

「……？何をしておるのだ？」

「夜一も流石に報告しただろう。あっちの様子も知りたいからな」
「そう……だな……」

翼は踵を返した。それに続くようにルキアが行く。

「レイディアン………侮れないな………」

ルキアがボソツと呟いた。

く夜一く

「それは真か？」

重々しい口調で話すは、やまもとげんりゆうさいしげくに山本元柳斎重國である。

「真ですとも、総隊長殿」

それに答えるは四楓院夜一^{しほういんよあいち}である。

「まさか・・・まだ生きてたとはな・・・」

「わしも驚いたぞ。あやつは闇の者とまで言われておったからのお腕を組む夜一の目は真っ直ぐ元柳斎を見る。」

「あ奴をこのままにはして置けまい・・・。緊急隊首会を開いたほうがよさそうじゃな・・・」

「では、わしが伝えるとしよう。なあーに、^{ソイフォン}碎蜂に手伝ってもらえればすぐじゃ！」

そう言うなりさっさと瞬歩で消えてしまった。

隊首会

「では！これより隊首会を行う！！！！」

部屋に声が響く。

「まずは、レイディアンという敵について知って貰わねばならぬ」「レイディアン？」

「あらまあ・・・こりゃあけつたいな・・・」

「めんどくさい事になりそうだな・・・」

「まさか……!!」

「フン! くだらん……」

「……」

「ム……」

「ほう! おもしろい!!」

「誰だあ? そいつは?」

上から、

ひつがや とうしろう

日番谷 冬獅郎

きょうらく しゅんすい

京楽 春水

うきたけ じゅうしろう

浮竹 十四郎

ソイフォン

碎蜂

くちぎ びやくや

朽木白哉

こまむら さじん

狛村 佐陣

くろつち マユリ

せんぱち

更木 剣八

ここから先は元柳斎の話がダラダラ続くので省略。

一護達の話にしよう。

ゝ一護・恋次・揚羽ゝ

「結局、夕方になっても見つかりませんでしたね」

揚羽の声すらも夕闇につつまれていくようだ。

白い建物の多い瀨霊廷は、何もかもが橙色に染まってゆく。

「一護、今日はこの辺にしよう。少し体を休めねえと」

「ああ、分かってるよ」

2人ともボンヤリと夕日を見る。

「とにかく行こうぜ？六番隊はすぐだぜ？」

「そうだな、そうすっか」

三人は結局レイディアンを見つけれないまま六番隊舎へむかう。

（それにしても・・・約束、覚えているのでしょうか？わたくし私だけでも約束した場所へ行かせて頂きましょうか？）

前言撤回、2人は六番隊隊舎へ、揚羽は約束の地へ行った。

（翼・ルキア）

「にしても、あいつらどこへ行ったんだ？」

「さあ・・・」

2人は屋根という屋根を飛び回る。
そんな2人の横顔も橙に染まる。

「なあ、ルキア」

「なんだ？」

「これは俺の予想なんだが……」

「だが、なんなのだ？」

一息ついて言う。

「あいつら、六番隊舎へ向かってるんじゃない？」

一瞬の沈黙

「ありうる……」

「あんの野郎！！約束ン事ぜってー忘れてんだろ！！！」

そこに飛んで来た1羽の揚羽蝶————

「翼様」

「ん？揚羽か」

「はい」

「揚羽！一護と恋次はどうしたのだ？」

「わたくし私は約束を守ってこちらに参じましたが？」

プツンツと何かがキレる音————

「今から恋次に連絡する……」

霊圧で羽織っている着物がふわりと浮き上がる。

2人は血の気が引いていくのを覚えた瞬間だった。

ピピピピピピピピピピ・・・

電話をコールする音。

『もしもし？翼か？』

「テメエ・・・ふざけんじゃねーぞ！！」

怒号が飛ぶ。

『うおっ！何だよ急に！！』

「急にじゃねえよ！馬鹿野郎！！」

『はぁ！？訳分かんねえよ！！』

「お前は・・・約束を忘れたのかぁ！！！！」

『あゝ・・・・・・・・！！』

「直ぐに来やがれ赤パイん！！」

そして乱雑に電話を切ったため、恋次の方ではブチィと電話の音が切れた。

その後2人は全速力で翼の元へ来たと言う。

にしても、約束とはなんのことなのか？それを紹介しておこう。

それは、出発前のことだ。

「一護、今日は家に泊まるといい。どうせ泊まるトコねえんだろ？」
「おっ？ いいのか？」

「遠慮するな。人数は多い方がいい。ルキアと恋次もどうだ？」

「私も行ってもよいのか？」

「ああ、かまわねえよ」

「んじゃ、俺も」

で、結局翼宅に泊まることが決定した。なので、見つからなかった時は、ある場所で待ち合わせをしよう・と言っておいたのだが、2人はすっかり忘れていたのだ。

結局、全員で翼宅へいった。

一護と恋次は顔に痣を作って――――――――――

拾六の書（後書き）

後書きは決まり次第、後で追加しておきます。
申し訳ございません!!

拾七の書（前書き）

遅くなってすみません（U）

では「どうぞー！」

拾七の書

「翼様！お帰りなさいませ！」

翼達を迎えたのは蒼い髪の女性だった。

「えーと・・・そちらの方々は？」

蒼い髪の女性は、少し首をかしげる。

「今日家に泊まる。^{うち}父さんたちには俺から言っておく」
「承知しました。^{みな}皆に伝えてきますね」

女性は一つお辞儀をすると、急いで皆に伝えに行った。

「翼、あの人は誰なのだ？」

ルキアが聞く。

「ウチの使用人の葵だ」

そう説明した後、翼は自分の部屋へと皆を連れてきた。

「ここでまっけてくれ」

スツと障子を開けると音もなく出て行った。

翼の部屋は、特に目だったところは無かったが、よく見ると行灯に^{あんどん}もタンスにもいろいろな細工がされており、どれも美しく、高級感

あふれる家具だった。

「流石貴族だな」

一護がつぶやいているとルキアが、

「一護、お主、将棋はできるか？」

「ああ、まあいちよう」

そう言うと、ルキアはどこからともなく将棋版とこまを出した。

「勝負だ！一護！」

「よし、望むところだ！」

しばらく将棋大会が続いたそうな・・・

（翼）

屋敷を歩いている。

時折すれ違う使用人達に声を掛けられていった。そして、ある部屋に着いた。

「入るぞ」

翼が一声かけると、

「入れ」

と中から返事が返ってきた。

カララ

ちよつと音を鳴らして障子を開ける。
中には1人の男性がいた。

「父さん……ただいま帰った」
「おかえり」

翼の重々しい口調にあっさり返す翼の父。

「友達が来てるようだな」

「まあな」

「……」

「今日、家に泊まる。いいだろう？ 別に」
「ああ」

それを聞いてから翼は少し笑顔になった。

「晩飯と風呂の用意は俺から言っておこう」
「ああ、頼むぜ」

翼は部屋を出て行った。
と、出て直ぐに葵と会った。

「翼様、何か御用はありませんか？」

「じゃあ、飯と風呂の用意をしといてくれ」

「かしこまりました。直ぐに」

一つお辞儀をして去っていった。

部屋に戻った翼は少しビックリした。

恋次がまるで生気を失ったような表情をしていた。

「また・・・負けだ・・・」

そうブツブツつぶやいている。

ルキアと一護にいたっては将棋をしている。

そして翼は揚羽に声を掛けた。

（何があっただ？）

（回り将棋をしていて・・・恋次ばかりどんどん駒が奥に行っちゃって・・・それで、5回連続で負けたことを気にして落ち込んでいます）

（成る程な）

揚羽に礼を言った後、翼は皆に言った。

「もう直ぐ飯だからな」

そう言った数十分後

一護達が座っていた目の前には、食膳が置いてある。
しっかり漆塗りされており、美しく輝く。
さらに驚いたのはその食膳の豪華なこと・・・

「もっと楽にしてくださいな♪」

そう言うは翼の母である。

「は・・・はい。えーと・・・」

「ああ、自己紹介がまだでしたね」

微笑む姿がとても素敵だった。

「私は桑ヶ谷 香と申します。で、こっちが・・・」

「桑ヶ谷 龍だ」

翼の母、香と父の龍。

「さあさ、召し上がってくださいな。折角の料理が冷めてしまますわよ？」

翼とは真反対の静かな性格の母親。

どうしてこんなにも大人しい人がいるのに翼がこんなにも男っぽく
なってしまったのかが分からない・と一護は考えていた。

食事をしている間もいろいろな話をしていた。

現世のこと

ソウル・ソサエティのこと

桑ヶ谷家のこと――――

ちょうど食べ終わった頃、葵が入ってきた。

「皆様、お風呂の準備が出来ました。よろしければどうぞ」

ニツコリ笑っていた。

「じゃあ入るか」

翼がゆっくり立ち上がる。

「男女別れておりますから、阿散井副隊長たちもどうぞ」

「ああ」

恋次が頷く。

風呂場の入口は少々遠かった。

少々短い廊下の先に、風呂場があった。

「では、ごゆっくり。着替えは後で持ってこさせますから」

「ああ、頼んだぞ、葵」

ハイと葵が頷いてから脱衣所に入った。

拾七の書（後書き）

使用人の名前←（翼専属の使用人のみ）

夜雛やびな 葵あおい

虎宮こみや 堇すみれ

都瞳寺とどうじ 瑠李るい

桜さくら 弥夜やよ

漢字がめんどくさいのですが、これが四人の使用人の名前です。
普通はなさそうな名前または苗字を入れてみました。
漢字も普通、使い無そうな物を選んでみました。一様

では皆様、次回は入浴シーンです。

ちよっとめんどう（殴）

・・・ではないのでがんばります・・・

拾八の書（前書き）

風呂ネタといっときながら、風呂ネタ殆どねえ……！！！！！！

やっべえー！！期待してた人、マジすいません（＞＜）

しばらく翼宅編続くんで、次に期待しといてくださいっ！

拾八の書

この家の風呂はすごかった。

10メートルほどの竹の壁。広々とした風呂。しかも温泉だ。
極めつけは竜の口から出る滝のようなお湯————

「な・・・なんじゃこりや・・・」

「あ・・・ああ・・・すごすぎる・・・」

一護と恋次は驚きを隠せない。

（ワカメ大使よりゃこつちのほうが百万倍いい銅像だな・・・）

恋次は六番隊の風呂場を思い出す。白哉の趣味（？）で入れたワカメ大使の銅像よりこちらの竜のほうが迫力があり、強そうだった。

この風呂場について細かな説明をしておこう。

まず、入って直ぐに石の道がある。飛び石ではなく、石畳のような道である。その左右は砂利じやりが敷き詰められており、四季折々に美しい景色を見せてくれる植物が植えられている。

現在、秋初めのためまだまだ青い葉が目立つ。

そして温泉の周りには、もう一本道があり、その先には小さな小屋（と呼ぶには壁が無いのだが）ある。

そこにも温泉が流れており、そこで体を洗ったりできる。

男女とも、風呂場の形は同じである。

一護達はゆつくり湯に漬かった。

「はあゝ．．．生き返るぜ．．．」

恋次が言ったことに頷く一護。

この温泉に入っていると、霊力を回復してくれる。（※傷が癒えるほどの効力はないのですが）

「何か．．．よくわかんねえな．．．」

そうつぶやいた一護に恋次が「何が？」と聞く。

「奴の目的だよ」
レイディアン

「は！？何言ってるんだ？あいつらの目的は世界の破壊、だろ？」

「なんだけど．．．どうも不自然なんだよな．．．」

「何がだよ．．．？」

「だってよ、死神に復讐してえんならさっさと俺達を殺してしまえばいいだろ？」

「まあ、確かに」

「てことは、誰か特定の奴を狙っているのか・一発で世界を破壊できる術すべを知っている、のどちらかの気がしてならねえんだ．．．」

風が・吹く

笹が揺れ、心地よい音を響かせる。

その沈黙を破いたのは恋次だった。

「どっちにしても、さっさと倒せばいいことだ」
「・・・だな」

2人とも天を仰ぐ。

瞬く星がこの安らぎの時をゆっくり動かしたように思えた時だった。

く女風呂く

ルキアも一護達と同様にこの広い風呂に驚いていた。

「—————」と思ったら、あまりそうではなかったようだ。朽木家宅も同じように広いのであろう。

チャポン

2人ともゆっくりと浸かっていく。

揚羽は小屋の方に居た。

「こういう時が心が休まるときだな」

ルキアの言葉に、「ああ」と返した。

風に揺れる笹がこすれあい一つの音色となる。

「……ルキア」

「なんだ？」

「お前達に、言っていないことを一つ思い出したんだ」

翼はいつも何かあるといろいろなことをルキア達に教えていた。

昔からずっと、ずっとである。

その翼が言ってなかったのだ。よほどのことだろうとルキアは思っ

ていた。

「なんなのだ？」

「俺が——————竜火を手に入れたときのことを・・・な」

これは・・・翼が死神になるよりも数年前の話

あの日は寒かった。

雪が降り積もっていて寒かった。森の殆どの木は葉が落ち、まるで水飴でコーティングされたようになっていた。

「ルキア！遊びに来たぜ」

ここは戌吊。ルキアと恋次が育った町。

「おお、来たのか!!」

「久しぶりだなあ!!!!」

2人は真っ先に駆け寄ってくる。

そんな2人に翼は持っていた風呂敷を渡す。

「やぁいい!!!」

恋次はそう言って早速風呂敷をあける。

すると中からキレイな重箱が出てきた。金色の細工が施してある。

その重箱を開けると、大量の牡丹餅ぼたんもちが出てきた。

「わぁ!お餅だぁ!!」

周りに居た何人かの子供たちも駆け寄ってくる。

その間に翼は背中に背負っていた巨大なクナイを手に持ち、壁に立て掛ける————立て掛けようとしたのだが、クナイが重すぎで、壁が壊れてしまうので、床に置いた。

全長1メートルほどの長さに、重量が約80キロくらいのクナイである。

(鞘さやのようなものに入れている)

「それにしても………」

「だから……」

「それはないってヴァー……」

「ハハハ！ありえねーよ！だって……」

ただの会話を繰り返している。

ここに来てから数時間。

突然翼のクナイの鞘にくくり付けてある伝霊神機がけたたましく鳴る。

「もしもし……」

『翼か？俺だ』

「兄貴か？何かあったのか？」

『お前、今どこにいる！？』

「戌吊だが……どうかしたのか？」

『その辺で虚の霊圧を確認した。近いんだったらちよつとひとつ走り頼む』

「りょーかい。直ぐに倒す」

伝霊神機をまたくり直し、クナイを背中に背負う。

「また……バケモノか？」

「ああ、チヨット行ってくるな。話しはその後でな」

翼はボロボロの布キレをめくり、外に出る。

グツと踏み込むと、瞬歩でその場を去る。

未だに雪が降る。

30センチも積もった雪の上をどんどん森へ向けて走って行った。

く森く

翼は我が目を疑った。

周りの木々がまるで自分を導くかのように倒れている。

（この霊圧の名残・・・虚よりも黒くて禍々（まがまが）しい・・・
・一体何なんだ!?!）

と、考えていると、木がなく・開けた場所へ出た。

「!?!?!」

翼は咄嗟とつさに横へ飛んだ。

雪の上に手をつき体制を整える。

「おいしいなあ……もう少して殺せたのによ……」

先ほど翼が居た場所には尾のようなものが森の奥から出てきた。
もしそのままあの場所へ居たら————今、この雪は赤く染ま
っていただろう。

「テメエ……虚じゃねえな……誰だ……!!」

叫び声が森の奥へと響き渡る。
すると、森の奥から大柄の男が出てきた。

（なんだ!?! こいつは!?!）

翼の目の前に居たのは、巨大な尾のようにしなるムチを持った、大
柄な男だ。

割れた仮面

胸の孔————

「てめえは何だ?」

「俺のことを知らないのか?」

男のムチをよく見ると、それは男の尾だった。
尾のようなではなく、尾だった。

（見逃していた————俺の馬鹿野郎……!!）

「まあ、いいさ。テメエが誰だろうが……」

翼はクナイを下ろし、横に付いている止め具を外す。
鞘をどこかに放ると、クナイを構えた。

「は！」

男はその長い尾を翼に向けて振るう。
翼はクナイで受け止める。

少し体制を崩しても、直ぐに立て直し反撃する。

「今度は・・・こっちからだ!!！」

翼は瞬歩で近づき、クナイを振り下ろす。
だが、こちらにも一向にあたらない。

(くそ・・・! しぶといな・・・この餓鬼!!!)
(さっさと倒さねえと・・・ルキア達が待ってんだ!!!)

前項姿勢をとり、クナイを地面に引きずるような形で相手に突撃していく。

「お・・・らあ!!！」

下から上へと振り上げる。

だが、どう攻撃しても止められてしまう。

翼は疲れて息を切らしてきた。
だが、それは相手も同じだった。

「次で・・・終わりに・・・してやるよ・・・!!！」

「ふふ……そうだな……そうしてやろう!!」

翼は両手でクナイを構える。刀身に霊圧をこめる。
相手は尾を前にかざす。そして、尾先を翼に向ける。

「ゼロ……」

男はそういうと、翼に紅蓮の光をぶつけてきた。

「くっ……」

クナイで受け止めるが、力が違う。^{パワー}

「うわあああああああ!!!!」

飛ばされ、木に叩きつけられる。

そのまま数本木を折り、やっと勢いが止まった。

（やべえ……意識が……!!）

翼はジッと相手を見るが、朦朧とした意識の中では、はっきりと見え
ない。

するとその時だった。

—主は何をしておる?—

突如聞こえた声に驚く翼。

もう一つ不可解なことは、相手の動きが止まったこと。

まるで時間が止まったように動かない。

—今、再び聞こう。主は何をしておる？—

「なにつて——」

—我の声をやっと聞いたか・・・翼、こちらへ来るのだ—

「はっ？」

すると、翼が居たのは真っ赤な世界だった。

野原も海も山も全てが炎だ。

—我の声、聞こえたならば恐れることなど何もない・・・・・・—

すると、今度はいつの間にか火口に居た。

「な・・・何が!!?」

『恐れるな』

バツと前を見ると炎の竜が居た。美しい竜だった。

『お前は、あいつに負けることを恐れている』

「・・・・・・」

翼は黙った。

『負けを恐れては、勝てるものにも勝てんぞ?』

「わかってるよ・・・・・・」

スッと藍色の目を炎の竜に向ける。

『ならば・・・主はどうしたい？』

「俺は・・・」

少し下を向いて考えた後、パッと顔をあげ、ハッキリ言う。

「勝ちたい・・・強くなりてえ！！！！」

炎の竜はしっかり・優しい瞳^めで言った。

『ならば、我が声を聞け。』

恐れるな。

強く在れ。

怯むな。

さあ、その強さ、紅蓮の炎に変えよ』

翼は手を伸ばす。

『我が名を呼べ、我が名は・・・』

翼はゆっくりと立ち上がる。

「ほお・・・まだ戦うというのか？その体でか？」

男は挑発する。

「・・・き・・・せ」

「なんだ？何言って・・・・・・・・！！」

男は翼の霊圧が上がったことに気づいた。

「焼き尽くせ！竜火！！」

叫びと共に現れた刀。鎖が触れ合い、音を立てる。

「貴様・・・」

男は尾を向ける。

「さっさと死ねば良かったもののおおおおおお！！！！」

槍のように尾が迫る。

だが今度は違った。翼は冷静に尾を切り落とす。

「ヒ・・・ヒイイイ！！」

男は逃げようとしたが、ダメだった。

元々重いものを持っていて相当なスピードを出していた翼だ。軽くなり、更にスピードを上げているようだ。

仮面を真っ二つに割る。

刀から炎が出てくる。

「地獄の業火に飲まれて消えろ」

そのあたり一面に火柱が上がった。

拾八の書（後書き）

あー・・・つかれたあ・・・

次回は、翼の過去の続きが少しと風呂ネタです。
今度は頑張ってみますヨお・・・

拾九の書

「結局、俺はあの場に倒れた。全く体が言うことを聞かなかった。後々駆けつけた兄貴達が言うにはあの一面だけ雪が全て溶けていた。てことぐらいだな」

「だから……お前は戻ってこなかったんだな」

「ああ……悪かった、な」

「気にするな」

それに、とルキアが続ける。

「実はな、お前の兄上が私たちの元に來たのだ。翼、お前を背負ってな」

「……は？」

翼は思わず聞き返した。

「お前の残留霊圧をたどって家にきたんだ」

翼は、「あのヤロー」と言って空を仰ぐ。

ルキアもつられて上を向く。

輝く星はただ静かに見下ろしていた。

静かに――――

バキッ

「……？」

バキバキ

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

バツシャーン!!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!!」

静かな時に響いたのは男風呂の竹が折れた音。

「な・・・・・・・・なんなのだ!!!?」

思わずそちらを向く。

と、揚羽が聞き耳を立てていた。

「ば・ばかやろう!何やってんだ!!恋次!」

「うるせえ!・・・・・・・・ちつくしょう、竹と竹の間に壁があったか」

「てめえ!覗く気マンマンだったろ!!!!」

揚羽がそれを2人に伝えると、2人とも一旦風呂から上がり、浴衣ゆかたに着替えた。

そして再び戻ってくると、それぞれが斬魄刀を構えていた。

「・・・・・・・・竜火・・・・・・・・熱湯風呂にして来い」

「・・・・・・・・すまぬな袖白雪・・・・・・・・あ奴等を冷凍してきてくれ」

・湯の温度はほぼ100度

←

・あまりの暑さに恋次は気を失った

←

・その後、何とか一護に助けられた

←

・終わり

「つたく、テメエは……」
「見損なっただぞ、恋次!!」
「……………（チーン）」

茹蛸^{ゆでだこ}状態の恋次。

「死なない程度にしたんだがなあ……………」

「絶対嘘だろ……………」

一護の言うとおり、間違いなく殺す気マンマンだったようだ。

開け放った窓から心地よい風が吹く。

全員が少しずつ眠気に襲われた。

「もう寝ようぜ？アホはこのまま永眠させとけ」

翼の提案に皆、

「賛成」

としか言わなかった。

2部屋に分かれている翼の部屋で、巨大なベットの
ある部屋に翼と
ルキア。そして揚羽が眠ることにした。
男達は布団で寝ていた。

この後起きることを

誰もが予想しないことが

起きる直前の

静かな夜だった

拾九の書（後書き）

終わった〜♪

何個も小説掛け持ちすると時間が．．．．u

ア．．．ハハハハハ．．．．ハハ．．．ハア．．．
（壊れた）

甘の書（前書き）

おそくなっちゃった・・・

スンマセ・・・

なるべく沢山書きました！
見てください！

甘の書

静かな朝だった。

巨大なベットから、翼がのっそりと起き上がった。
未だに隣で寝ているルキアを起こす。

「ルキアゝ・・・朝だぞ」

「ん・・・んん・・・」

ルキアもゆっくりと起き上がった。

「今何時だ？」

ルキアは眠い目を擦りながら聞く。

「8時。相当寝ちまってたな」

「みたいだな」

一つ、大きな欠伸アクビをする。

「揚羽ー朝だぞ・・・て、あ？」

翼の目線の先には揚羽は居ない。

「翼様ー。朝ですよ」

起こしに来たのは虎宮こみや 堇スミレのようだ。

「翼様、一護と恋次はもう起きてますよ」

その落ち着いた声色は揚羽のようだ。

「今行く!」

そう言って翼はベットから降りた。

ルキアも反対側に降りる。

黒衣に着替え、部屋を出た。

「おはようございます。食事の用意はもう出来てますよ」

「そうか。……。バカ2人はどうしたんだ?」

「あの2人でしたら『走ってくる』て言っただっか行っちゃいましたよ」

堇に代わって揚羽が話し始めた。

「あ奴ら……。 」

ルキアはやれやれ、とでも言った表情でため息をついた。

「取りあえず、お食事にしましょうか?」

「おう」

3人と1匹は下へ降りていった。

翼の家の朝御飯は普通だった。

白飯に味噌汁、焼き魚と、普通だった。

「あら、ルキアさんおはよう」

「おはようございます龍殿、香殿」

ルキアは朽木家の者としての礼儀は身についているようだ。

「いただきます」

翼は食べるのが早かった。

髪をまとめていない分、見た目は女性らしいのだが、食いっぷりはやはり男っぽい。

（もっと落ち着いて食べぬのか？こ奴は）

ルキアは隣で食べる。

そして5分後

「いっさん」

翼はカチャンと茶碗を置く。

「そう言えば……」

龍が翼の方を見る。

「恋次と一護？ だったか？ あいつ等はどうしたんだ？」

龍が聞くと翼は

「知らん」

と、だけ言ってから茶を啜った。

「ご馳走様でした」

ルキアが丁度食べ終わった。

「どうせそこら辺におるだろう。探しに行くか？」

「だな。ったく……メンドクセエ」

揚羽は翼の肩の上に乗った。

「ちょっと行ってくらア」

「行ってらっしゃい」

香は微笑んで翼達を見送った。

翼は髪を束ねながら玄関へ向かった。

草履をさっさと履くと、刀を携え外へ飛び出していった。
ルキアも同等に出て行く。

「で、あいつ等はどこに・・・・・・・・!!!!!!」

「な、なんだコレは!!!!!!」

2人の目の前に合ったのは、あちこちが破壊された澁霊廷の街並みであった。

「ルキア！翼！」

聞こえたのは一護の声だった。

「一護！恋次！」

2人はルキアと翼に合流した。

「一体何があったんだ?!」

「分かんねえ。朝起きて外に出たらもうこうなっていたんだ」

恋次は壊れた街並みを見て言った。

「にしても何でここだけ壊れてねえんだ？」

一護が翼の家のほうを見る。

「良く見ろ、家の周りに結界が張ってあるだろ？」

一護が目を凝らしてみると、まるで蜘蛛の糸のように、一瞬、キラリと光った。

「なあるほど……って感心している場合か！！俺の馬鹿！！」

一護が自分の頭を殴る。

「俺は元柳斎ンとこ行ってくる。恋次とルキアは隊舎に戻っとけ。白哉と浮竹も心配だろ？」

「ああ、わりいな」

「すまぬ」

2人は左右に分かれて自らの隊舎に向かっていった。

「なあ」

「なんだ？」

一番隊隊舎に行こうとした翼を一護が止めた。

「あの結界、相当強力だな」

「それがどうした？」

「イヤ、中はまるで別世界だな・と思ってよ」

「……？まあ、もともと護廷十三隊とは交わりの少ない家系だからな。家と仕事場は元々空間自体違うし、俺は別にこんな事に首を突っ込まなくても良いって訳だ」

「じゃあ、どうしてお前は毎度毎度こうやって首突っ込んでんだ？」

一護が真っ直ぐ翼のほうを向く。

「友^{ダチ}の為だ。それ以上もそれ以下もねえよ」

翼はニヤツと笑うと、走って行った。

「あの・・・一護・・・」

「なんだ？揚羽？」

「私たちはどうすれば良いのでしょうか？」

「・・・・・・あ」

一護はしまったという顔をしていた。

「と、取りあえずその辺ブラブラしようぜ！それしかする事ねえし、敵に会えるかも知れねえし」

「ですね」

揚羽は走り出した一護の後を追っていった。

ゝ恋次ゝ

（隊長・・・！）

翼の家に張り巡らせていた結界で、外の様子がサッパリ分からなかった恋次は自身の隊長であり、ルキアの義兄である白哉の事を心配していた。

「と、ここ曲がったら近道だったな」

恋次は細い路地に入って行った。

そして、抜けた先に六番隊隊舎があった。

「？ここはほとんど壊れちゃいねえな」

恋次に気づいた隊員の1人が近寄ってきた。
理吉だ。

「恋次さん！」

「理吉か。何があったんだ？」

「破面が襲撃してきまして・・・」
フランカル

「そうか・・・隊長は？」

「緊急隊首会に呼ばれました」

「分かった。被害状況を教えろ」

「はい！えくと・・・」

理吉の話を聞きながら、隊舎を蹂躪している恋次であった。

ルキア

「浮竹隊長！」

「朽木！」

ルキアは皆が慌ただしくしていたところに戻って来た。

「す、スミマセンッッ！！遅くなりました！！」

「大丈夫だ。清音と合流してくれ。俺は隊首会に行かなきゃ行けなくてな」

「は、はい！」

ルキアは修復作業に手を回していた。

「あー朽木さん！こっちこっち！これ運ぶの手伝って！」

「はい！」

ルキアは工具の入った箱を持ち、清音のところに持っていく。

（時間が掛かりそうだな・・・）

ルキアはフウツと息を吐いた。

く翼く

バンッ！と扉を開ける。

「元柳斎！何があったんだ！！」

「翼か」

「そうだよ！で、何があったんだ！」

「破面が攻めて来たのじゃ」

「！！奴等か」

「うむ。相当な力量の持ち主であろう」

「チッ、つーか隊首会はどうしたんだ？だいたいやるだろ？こーゆー時」

「今から行うところじゃ。お主も来い」

「わあったよ」

翼はさっさとその場を立ち去るのであった。

く一護&揚羽く

「やっぱいいねえよな」

「ですね」

開けた場所に座り込む一護。
後ろの壁が妙に冷たい。

「もー来たのー？はーやいねえ」

そう言うはレイディアンであつた。

「レイディアン！！！」

揚羽が叫ぶ。

「デメエ・・・！！」

一護が斬月を抜く。

「えー？何怒ってるのー？貴方には関係ない場所じゃん？」

「うっせえ！！」

一護は斬月を振りかざした。

「月牙天衝！！」

斬撃が飛んでいく。

「はい、ハーズレ♪」

レイディアンは軽々と避けた。

「良い物見せてあげよつか？」

レイディアンは楽しそうに刀を抜く。

「貴方達が一生頑張っても届かぬ力よ」

レイディアンは高いところへ登る。

モルディダボニタ
「捕らえろ美喰」

レイディアンの体は真っ白な殻に包まれそして、口が開くようにガパツと殻が開いた。

レイディアンはその中心に居る。

「防御力も攻撃力もバツグン！さあ、どうする？」

「戦うに・・・」

「決まっているでしょう？」

「あーりゃりゃ」

レイディアンは殻から伸びた触手のようなもので威嚇した。

「いいのかな？」

「何がだ」

「う・え☆」

一護が上を向くと、デアロが迫っていた。

「!!」

斬月で受け止める。

デアロの攻撃は重く、一護には耐え切れなかった。

「オワアアアア!!」

弾かれ、遠くに吹き飛ばされた。

「一護!」

「おおっと!よそ見してる暇は無いよ!」

レイディアンは触手を揚羽に向ける。

「破道の四 白雷!」

揚羽の体の前から一直線に雷が走る。
いかずち

触手を突き抜け、殻に当たる。

「甘いよ……フレア様♪貴女の力はこんなものではない筈ですよ☆」

「何を……何を言ってるのですか!!」

「フレア様?分からないの?記憶喪失って本当なんだ……でもね」

レイディアンが妖笑を浮かべた。

「その霊圧はフレア様……つまり破面^{アランカル}の、貴女の力だよ」

揚羽は、何かを思い出しそうになった。

「破面の……力……」

ドクン

「解き放ったら？私も、その姿じゃつまーんないっ」

ドクン！

「フレア様、早く……」

ドクン！！

「元 #1（プリメーラ）^{エスパーダ} 十刃^{エスパーダ}って言ったほうがいいのかなあ？早く思い出してよ……本当の姿をさあ！！！！！」

と、レイディアンが言った瞬間、爆発的に霊圧が上がった。

「……フフフ！やーと姿を見せてくれたわね！フレア様！！」

「揚羽……？」

一護の目線の先に居たのは――――

薄紫色の髪をした女性だった。

甘の書（後書き）

翼 モルディダボニタ「美喰って……」

なんかね、ポルトガル語で美喰って打ったら『mordida
onita』って出た。

翼「ふーん。で、読み方あってんのか？」

逃↓

翼「までコラァ!!!!」

甘巻の書（前書き）

揚羽の見た目（破面時）

紫の髪は腰まで降りている。
瞳は濃い紫色。

背中には地獄蝶の名残の黒い羽（けっこうデカイよ）が生えてい
る。飛ぶ事可能。

で、いーやー♪

あ、仮面もちゃんとあるよ〜

甘巻の書

「揚羽……なのか!!?」

フワリと紫の髪がなびいた。

「はい」

その声は揚羽だった。

「皮肉にもレイディアンのおかげで記憶が戻って、元の姿に戻れました」

一護はネルを思い出す。

ネルも今の揚羽と同じような事が起きていたからだ。

「さて……かかってきなさい、レイディアン」

「いつまで上司面してんのよオオオオオ!!!!」

無数の触手が揚羽に迫る。

「揚羽!」

「大丈夫! 一護はデアロを!!!!」

揚羽は臆する事もなく走る。

「くそう!!!!」

レイディアンの攻撃はヒラリヒラリとかわされていく。

「レイディアン、クリスティンとフルームはどうしたのですか？」
「クリスもフルームも今や監獄の中よ！！貴女が逃げたせいだね！！！！」

触手と刀が交わる。

わたくし
「私は逃げたのではない！！ただ・・・」
「弁明なんて聞かない！！」

レイディアンへの攻撃は強さを増した。

（ああ・・・これも全ては私のせいなのね・・・）

く#1十刃 フレア・ディアルく

「レイディアン、デアロ、クリスティン、フルーム、何処ですか？」
コツコツと歩く音以外聞こえない。

「フレア様！お呼びで御座いますか！！」

「クリスティン、フルーム、ちよつと頼みごととしてもいいですか？」
「は！なんなりとお申し付け下さい！」

「ここからは遠いのですが、下っ端の破面が暴れまわっていると情報が入りました。クリスティン、貴方はレイディアンとデアロを呼びに行つて下さい。フルームは私と共に来て下さい」

「はい！！！」

青い髪の破面、クリスティン

赤い髪の破面、フルーム

桃色の髪の破面、レイディアン

漆黒の髪の破面、デアロ

そして、紫の髪の破面、フレア。

「フルーム！！此方^{こちら}に誘導してください！」
「はいな！！！」

フルームは逃げ惑う反逆者たちを確実にフレアがいる方向へ誘導していった。

「フレア様！」

「終わりです！！！」

フレアがそう言った後、反逆者達はバタリバタリと倒れていった。

「さすがフレア様！！！」

「ありがとうフルーム。……結局あの3人は来ませんでしたね」

「クリスが見つけれられたかどうかもアレですけどね」

「そうね……」

「フレア様？」

フルームは不思議そうにその顔を覗き込んだ。

「どうかしましたか？」

「……なんかね……最近力が抜けていってる感覚が酷くなってきた……」

「！！！！！」

「しばらくは魂魄なんて食べてないものね……」

「フレア様……」

「心配しないでフルーム。さ、帰りましょう」

「……はいな」

2人はラス・ノーチェスへと帰っていった。

「フレア様！フルーム！お帰りなさい！」

「クリス、ただいまー！！！」

「ただいまクリステイン。レイディアンとデアロは？」

「は・・・どうやら現世に行っている様で」

「またですか・・・あの2人は懲りないわね」

「そりゃそうですよ。あの2人はフレア様の力を封印した死神を許さない、と言ってますから。本当にあの2人はフレア様の事が大好きなんですよ」

クリスの言葉にフレアは嬉しそうだ。

「フフ・・・でも私も心配だからちょっと現世に行ってくるわ」
「私達も！！！」

「フルームも疲れたでしょう？クリスと一緒にお休みなさい」

「でも・・・！」

「大丈夫。死神にやられるほど私、弱くなった覚えはありませんよ」

と言うと、ガルガンタを開いて現世へと向かった。

（現世）

「あいっかわらずシヨボー町だと思わない？デアロ」

「そうですね。レイディアン様」

「様は無し！！今じゃ私達の上はフレア様只お一人よ」

「承知いたしました」

レイディアンとデアロは元々の上下関係があったものの、今やフレアの下という同じ位だ。

2人が危なかったのを救ったのはフレア。その時に死神によって力を封印されてしまった。

「あの人は命を懸けて私達を守ってくれた。今度は私達の番よ」
「もちろんです！！」

真正面に現れた死神に対し刀を抜いた。

「破面め！覚悟しろ！！」

「破面舐めるなよ！！」

死神勢対破面。

この勝負はしばらくの間続いた。

2時間後

「デアロ!!」

「レイ・・・ディ・・・ア・・・ン・・・様・・・逃げ
て・・・下さ・・・い・・・」

「デアロを置いて逃げらん無いよ!!」

九死に一生。2人は逃げも反撃もせず、ただその場に居た。

「終わりだな」

死神の斬魄刀が振り下ろされる。

ギイイイイイイイン

斬魄刀を細い刀が受け止めた。

「「フレア様!!」」

「心配しましたよ2人とも・・・さあ、帰りましょう」

「逃がさん!!」

声を張り上げたのは一人の死神――――

桑ヶ谷 龍だった。

「2人共お逃げなさい!!」

「フレア様を置いてなどいけません!!」

「いいから行きなさい!!」

フレアは相手に突っ込んでいった。

「かわいい部下によくも・・・!!」

「コレが俺達の仕事なんぞな!!」

刃をまじ合わせる。

「貴様を倒す!!」

「まあ、恐い」

全く感情のこもっていない声色で相手を挑発する。

この間に逃げようとしたレイディアンとデアロは互いが互いを支えあって立ち上がった。

「そこの破面を逃がすな!!」

「ヤバッ!!」

「レイディアン様!俺を置いて逃げて・・・!!」

「逃げないってば!!捕らえろ!!美喰!」
モルディタボニタ

触手が蹂躪する。

「あまり長くは持ちそうにねえぜ？」

わたくし

「私、あの2人を信じていますから」

「そーかい!!」

2人が刃を交えようとした時だった。

「フレア様から……」

「離れろ!!」

フルームとクリスだ。

「貴方達!!」

「スイマセン! やっぱ心配だったんで来ちゃいました!!」

「5人で帰りますよ!!」

デアロとレイディアンも心底嬉しそうだった。

とうとう戦いに終盤が来た。

死神勢も数が減り、破面側も疲れが出てきていた。

「どうやら・・・お前らは倒すより封印したほうがよさそうだな」
「できるかしら？」

「ああ・・・頼むぜ！藍染！」

「はい。砕けろ、鏡花水月」

「な！！」

5人の視界が真っ白に染まった。

「全員！退避！！」

フレアが叫ぶ。

「はい！！・・・なんで！？どうして藍染が！！？」

「アイツ・・・俺達を裏切ったな・・・！！！」

「元々奴は死神！信じた私らがバカだった！！」

「ゴチャゴチャ言っていないで今は逃げるんだ！！」

ガルガンタを開く。

が――――

逃げたのはクリスとフルームだけだった。

後の3人はガルガンタを通る前に壊されてしまった。

「つくそ！！」

「フレア様！」

「大丈夫よレイディアン」

3人は再び刀を構えた。

「封印!!」

「なに!？」

「何時の間に!!？」

レイディアンとデアロの体が拘束される。

「2人共!!」

「た・・・すけ・・・てエ・・・」

「フレア・・・様・・・」

だがフレアは2人から目を背け、更にはその場所から逃げ出した。

「どう・・・して？」

「フレア・・・様・・・？」

2人の体は封印された。

この後、デアロは偶然出来た結界の隙間から結界を崩し、外へと抜け出したのだ。

フレアの気持ちは押しつぶされそうだった。

（ごめん……ごめんなさい……！！でも今の私には結界を壊す力も自らの力を解放する力も無い！！私があの場合に居ればきつと貴方達の目の前で私は死んでしまう……。そんな姿は見せたくない。私を愛してくれてる貴方達には絶対に見せたくない！！！私……。愛されないまま死にたいから。愛する者の居ない場所死にたいから！！！）

フレアは2人から離れた場所で立ち止まった。

目からは大粒の涙が零れ落ちる。

「覚悟は決まったかな？」

「ええ……。好きになさい。私はあの2人の前だけでは絶対に死にたくないの。でもあの2人が居ないのであれば……」

フレアは刀を捨てた。

「斬りなさい」

「その心意気……。フツ、俺の餓鬼にも見せてやりたかったよ」

ザンツ

フレアの意識が遠のいた。

（レイディアン・デアロ・クリスティン・フルーム……。ありがとう……。）

笑いながら目を閉じていく。

(さようなら・・・)

「私は・・・私の為に死んだ。そのことを今更後悔なんてしていない。お聞きなさいレイディアン。私はあの時死んで、魂が無きものになろうとしていた時に翼様^{あのおかた}に救われた。力の無い私の霊力を蝶の中へ・そして死神の力で私はこうしてここに居ます。・・・・・・こんどは私がある方に恩返しいたします。それがたとえ、貴女でも」

「うああああああ!!!!!!」

激しい攻防戦が続いている。

「やれやれ、もう一つ真実を教えようとなりましたが……貴女が
そう来るなら私も……!!!!」

カシャリ、と刀をかまえる。

「羽ばたけ 銀揚羽蝶」
バタフリー

霊圧が彼女を包む。

霊圧の嵐が晴れて出てきたフレア……否、揚羽は、顔にエステ
イグマと背中に生えていた黒い地獄蝶の羽は、白い破面^{かめん}で縁取られ
た。

「さあ！ 行け！」

袖から銀色の蝶を出す。

「効かないよ!!!!」

ガードして、かわす。

触手は無残にも数本切り落とされてしまった。

「銀色蝶たちの一匹一匹が刃……さあ、貴女に交わせるかし
ら？」

戦いは今幕をあげた。

廿式の書（前書き）

うわー・・・めっちゃくちゃ遅くなったよ・・・

なんかもの凄く展開早いし・・・

もーGGGDぱーりいーだ！！（オイ

廿式の書

「ではこれより、緊急隊首会を行う！」

元柳斎は重々しく、威厳溢れた声で開催を宣言した。

「・・・とか言ってる間に来やがったぜ？あいつら・・・」

「分かっておる。今は、少しばかり話を聞け」

「あー分かったよ」

翼は元柳斎の座っている椅子の後ろ、他の隊長たちからは見えない位置に座った。

「ソイフオン碎蜂隊長、アラシカル瀨霊廷の現状は？」

聞かれた碎蜂は一步前に出る。

「はっ、アラシカル瀨霊廷の70%が破壊され、今は復興作業に当たっています。破面とは死神代行黒崎一護と、身元不明の破面が戦闘中です」

「破面？」

京楽は、興味ありげに聞いた。

「うむ、紫の髪の破面だと聞いている」

「んー・・・どーして破面が破面を・・・」

「今調べている」

碎蜂はそう言うと、元の位置に戻った。

「卯ノ花隊長、怪我人はどうなっておる？」

卯ノ花も碎蜂同様、一步前が出る。

「はい、特に変わった事はないのですが、重傷者が多く、人手が足りていないのが現状です」

「そうか・・・」

元柳斎は少しだけ目を開いた。

「ったくよお！！さっさと斬りゃあいいのによお！！」

十一番隊隊長、更木剣八は、めんどくさそうに言った。

「待て剣八、まだ俺の話が終わっちゃいねえ」

翼はのったりと立ち上がると、皆を見据えて話し始めた。

「まず、紫の髪の破面。こいつぁ俺の部下だ。危険性は無い」
「破面が部下・・・！？」

日番谷は目を丸くした。

「揚羽。見た目は地獄蝶だが、中身は破面だ」

続けるぜ

翼は日番谷の疑問に簡潔に答えた。

「怪我人のほうは今ウチのモンが向かってる。で、ワリィんだが烈^{れっ}」
翼は卯ノ花のほうに体を向ける。

「お前の隊に修理頼んどいた鈴があるだろ？」

「ええ、確かに預ってます」

「それを受け取って来いっーのが本心。で、怪我の治療には俺特性の薬を持たせてある。そこんトコ、よろしくな」

「ほんとに、あなたは自由奔放ですね」

「・・・烈？なんか顔が怖い・・・いや、やっぱなんでもねえ。ワリィ・・・」

どこに地雷があったのか、翼は汗をダラダラ流しながら考えていた。

「とにかく、これが現状である。被害は今も尚拡大中。よいか、必ず破面共の動きを止めるのじゃー!!」

『はっ!』

元柳斎の一言で、隊首会は終わり、碎蜂・剣八は即行でその場から消えた。

「さあって、・・・一護・・・揚羽・・・無事でいろよ・・・」

そう呟いた後、不適にニヤリと笑う。

（準備したら直ぐ行くかな・・・）

翼が手を横に振るうと、酔ってしまいそうなグニヤリとした空間が開き、その中に飛び込んだ。

そのころ、一護もデアロとの戦いに奮闘していた。

「うおおおおおー!!」

「はぁ!!」

刀同士をぶつけ続け、火花が飛び散る。

一護は距離を取った。

「本気で行くぜ！」

右手を突き出し、左手でその右手を添えるように掴む。

「卍！解！」

そう叫んだ後に、霊圧の嵐が巻き起こり、一護を包む。

「天鎖斬月！！！」

黒く、細い刀を手に持った卍解した一護が現れた。

「ほう・・・卍解か・・・なら、私も刀剣解放レスレクシオンといきますか・・・」

（あいつの刀剣解放レスレクシオン・・・！！）

一護は翼から聞いた話を思い出していた。

く翼宅、深夜く

一護はなんとなく寝付けなかったので、少し風でも浴びようかと縁側に出ていた。

「どうした一護？」

後ろから、音も無く近づいてきた翼に一瞬驚きはしたが、皆が寝ているので必死に声を抑えた。

「な、なんだよ急に……！どっから湧いてきた！」

「人を虫みたいな言い方すんじゃないやねえよバカ」

翼は髪をおろしてパツと見はスッゲー美人の女性。

中身は超！男勝り。

「……一護、黒丸がな、いくつか情報を集めてくれたんだ」

「あ？情報？」

「ああ。ま、一樣聞いとけ」

「……なんで俺だけ？」

「お前が一番デアロと戦いそうだから（笑）」

「（笑）がなんかウゼエ……」

翼は一護の横に腰掛けた。

「まず、雛森が攻撃を受けたときはな、アイツが言っていた事らしいんだが……」

翼はスゥと目を細めた。

「デアロに何かあるような、ワケアリなことを言っていたんだ。まあ一番気になるのは奴を上回る霊圧……ってトコだな。

で、俺が受けた攻撃……覚えてるか？」

「ああ、直接内なる世界に干渉するアレだろ？」

「ああ。アレは厄介だ。どんなに干渉を拒もうとしてもそれを無視するかのように侵入。更には竜火自身にも影響が出ちゃったワケだ。ホントはな、直ぐに戦闘態勢に入るような奴じゃねーんだ」

翼は一護に対し、すまなそうに言った。

「お前……知ってたのか？」

「ああ。見えてたぜ。全部な」

ニヤリと笑いながら、目を指差す。

「ま、気をつけるこったな」

よっこいしょっと、腰を持ち上げ部屋に戻った。

一護もそろそろ寝るか、と部屋に戻っていった……………

「表裏一転・『反世』」
ランチモンド

手足が槍のように鋭くなっただけという、とても質素な刀剣解放だ
レスレクシオン
った。

「なんだ・・・？ほとんどかわんねえじゃねーか・・・」
「ですが、私の刀の能力は知っておいででしょう？」

デアロは不適に笑うと、腕を突き出して一護に迫る。

「くッ！」

斬月で防ぐが、なんとその腕は刀を通り抜けていく。

（・・・！？）

驚いた一護は瞬歩で距離をとった。

（な・・・なんだ今のは・・・！？）

斬月を見ているが、黒い刀身には傷どころか、全く何も変わってはいなかった。

「おやおや・・・惜しい・・・あと少しだったのに・・・」

クツクツと喉の奥で笑う。

「ッ舐めんじゃねえ!!」

一護は再び飛びかかっていった。

一方、揚羽とレイディアンはというと、今のところは揚羽が押ししていた。

レイディアンの『美喰』モルディダボニタの触手をいくつか切り刻んでいた。揚羽の袖の中に銀色の刃蝶達が戻って行く。

「へえ〜・・・腕は落ちてないようね!!」
「ふふふ・・・これでも元1#プリメーラですから」

そう言うのと、身体からだを回転させた。
すると、刃蝶が揚羽を包む。

（————!これは・・・）

刃蝶達が散った後、そこに揚羽の姿は無かった。

「しまった・・・！銀羽蝶隠れ・・・！！」

「どこを見ているのですか？」

レイディアンの直ぐ後ろに、彼女の姿はあった。

「防御モード！！」

レイディアンがそう言うと、殻が閉じ、その身を守った。
無数の蝶達が殻に当たっては跳ね返る。

「流石に・・・硬いですね」

触手が襲ってきたので、揚羽はレイディアンから離れた。

「ウフフ・・・アンタの生い攻^{なま}撃位じゃあ私はやられたりしないわよ！！」

「あらあら、ならばその殻が閉じる前に蝶を入れて差し上げましょうか」

バチバチと視線だけで火花が飛び散っているようだ。

と、その時だった。

バキン・バキンと空間にヒビが入ったかと思えば、そこから誰かが下りてきた。

と、いうよりも落ちてきた。

「いったゝもう、何よゝ・・・」

「しゃーねーだろ。隊長命令だ」

「だからってゝ！！急に落とすことないジャン！！？」

「俺にキレてんじゃねーよ」

落ちてきたのは死神の男女。

男は肩幅が広くしっかりとした体系で、女は男とは反対に華奢きゃしゃで腰の大きな鈴つきリボンが特長だ。

「えゝと・・・今回の相手はどっちだっけ？」

「ああ・・・あっちの破面だ」

男はレイディアンを指差した。

「それと、もう一人。あっちで死神代行とやらと戦ってる」

「ふゝん。じゃ、アッチが私だね」

「ああ」

「ほんじゃ、頑張かえでってね剣山けんざん」

「お前もな、楓」

男・・・剣山はそこに残り、女・・・楓は瞬歩で消えていった。

「アンタ・・・何者よ？」

「俺か？俺は王属特務 零番隊第四席、乃華のか剣山けんざん」

「乃華・・・女性っぽい苗字ですね」

「うるせえ！人のコンプレックスに触れんな！！」

剣山は、自分の苗字のことをとても気にしていた。
そこを揚羽に言われたものだから、たまったもんじゃなかった。

「死神……血祭りに上げたら楽しいんだろーな」
「ほう……俺を血祭りに……か……」

剣山は打って変わって斬魄刀を抜いた。

「ぶっ潰してやるぜ」

斬魄刀を構えて、息を吸った。

「な……なんだお前は……!？」

一護は突如現れた楓にあたふたしていた。

「初めまして、死神代行サン」

「貴様……何者だ……」

楓を見て、デアロはいかぶしげに目を細めた。

「私は王属特務 零番隊第五席、風鈴楓。ふうりんかえで たいちよーの命令で、貴方を倒しに来ました♪」

「零番隊・・・てことは、翼の・・・」

「そ、部下ってコト」

楓は飄々とした軽い口調で答えた。
ひょうひょう

「えっと・・・あなたの名前は？」

「お、俺は黒崎一護・・・」

「一護か。ヨロシクね」

楓は一護の名前を聞いた後、さっきとは違う凛とした表情になった。
りん

「さあって、早く終わらせましょうか。隊長に怒られるの、ヤダし」

だが、そう言う楓の腰には刀はない。

「お前・・・斬魄刀は・・・？」

「あるよ。腰にね」

「腰・・・？」

だが、あるのは大きな鈴のついたりボンだけで――――。

「ま・・・まさか・・・」

「そのまさか」

楓はリボンをほどき、手に持った。

そして、剣山同様息を吸う。

「二刀両断！斬鬼！！」
「吹き乱れろ！風嵐！！」

解号と共に、霊圧の嵐が二人の身体を包んだ。

廿式の書（後書き）

こんな小説でも・・・読んでくださり、ありがとうございました・
・
・

翼「くれーなあ、オイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1150h/>

破面襲撃

2010年10月24日01時38分発行